

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可 昭和廿九年五月一日発行廿九年五月号 (毎月一回一日発行) 創刊大正十三年・通刊四四四号

# 川柳の雑記

Pensoj flugas trans la land - limon THE SENRYU ZASSHI



五月号

No. 444

麻生路郎女士畫

川柳雑誌社主催

6月本社句会

兼題  
黒髪  
ほろ口  
スタイル  
早合点

# 本社五月句会

日時 五月六日(水) 午後六時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停スグ東北側

兼題 「メンナゲル」(三題)

川村好郎選

「石」(三題) 正本水客選

「手酌」(三題) 小川恒明選

「親子」(三題) 八木摩太郎選

席題 三題(当日発表) 麻生路郎

柳話 呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 いさむ・南宗・文秋・唐佑・八郎・与呂志

清人・すむ・薫風子・柳宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円同封

(〆切五月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

## 川柳雑誌社句会部

電・大阪 〇六〇八一

麻生路郎先生著

## 川柳とは何か

価 二五〇円  
送費 七〇円

—川柳の作り方と味わい方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、新界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

麻生路郎著 好評噴々

## 新川柳観賞

価 二五〇円  
送費 八〇円  
B6版  
二五〇余頁

(毎日新聞評)

川柳の味わい方・五百数十句

ものである。

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手にかけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にして他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地  
電話 大阪 〇六〇八一  
郵務 口振 大衆 七五二五〇

# 至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

# 不朽洞句帖

麻生路郎



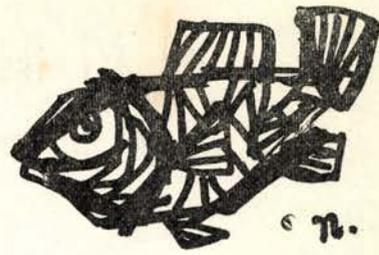
山と河 人ひとりなき舞台なる  
 雑木林を通り抜け俗事へ戻って来  
 斜陽の哀れへピアノが鳴ってる  
 老らくの恋が土筆をふみにじり  
 ささえの壺焼愚痴も淋びしき  
 春うらら帆を数えてる純情さ  
 しがない暮らしというのは他人から見てのこと  
 俗のつれづれ石を愛する  
 論説委員オレにも実行出来ないが  
 学生デモ巨万の鳥と争えり  
 星が流れた あれば放庵だったのか

小杉放庵題く

## 川柳雑誌★五月号目次

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
川名句抄の鑑賞	麻生路郎	(4)
興安嶺の雨	東野大八	(30)
明治大正柳誌巡礼	奥津啓一朗	(28)
川傍柳初編研究(四)	丸十府・岡田甫	(14)
	川端柳風・高須咄三味・前田喜代人	(14)
	岡崎重義・清博美・藤井和雄	(14)
三条東洋樹さんへの注文	鈴木九葉	(12)
柳誌のあり方批判(月評)	長野笛朗	(32)
妻を語る	麻生路郎	(26)
★続・川柳書架	(25)	
	★現代柳人録	(18)
句評デイスカッション	河野春三・早川清生・林夢虹	(22)
	西川晃・橋高藍風子	(22)
柳志寸言	本多柳志	(25)
小柴	富士野鞍馬	(11)
大万川柳大会十三周年記念を迎えて		(40)
大万川柳「平和」発表		(41)
私の好きな愛欲の一句	咄三味・鞍馬・咄・大八	(28)
	東洋樹・紋太・閑古	(28)
不朽洞の人々	竹莊氏の巻	(39)
★		
川柳塔	麻生路郎	(6)
同舟近詠	諸家	(25)
近作柳櫛	麻生路郎	(18)
	北川春巢	(18)
金泥集	麻生葭乃	(31)
各地柳壇		(42)
★柳界展望	社の黒板	(46)
入門講座	清水白柳	(36)
一路集	「深入り」	(36)
	「うたたね」	(34)
	「忘れる」	(34)
★柳構室	森田若人	(46)
	路郎生	(46)



川柳

## 名句抄の鑑賞

麻生路郎

若さはいいなウインク一つにも

(無鬼)

そうだと、若さはいいなものだ。若い姐さんの流し眼なら、ピリピリッと来るが、ばばア芸者などのウインクと来たら、こちらのスイッチが切れているので、おあいにくさまと言うわけだ。

この作のウラには老境に足を踏み入れた人の何んともなく淋しい心が内包されている。

〔三五〕

食べられるネギが落ちてた田舎道

(七面山)

ネギが田舎道に落ちてたという、何んでもない一現象を見通さずにとらえた手際は鮮やかだ。

食べられるネギは人間味につづくものとして大きな働らきをしている。

作者は喰べられるネギを、田舎道を歩

きながら見つけて、フト暇時の物不足時代

がアタマをかすめ、勿体ないア、あの当

時はこれだけのネギを獲得するのに、どれ

ほど外くの精力を費やしたことか、これだ

けあれば、ゆうに一家の一日の総菜をまか

なうことが出来るのと思ったのであろう

か。これは筆者の想像に過ぎないが、それ

にしても一寸異色のある句として推奨したい。

社の顔を自分の顔と思ひ居り

(孝正)

若い頃には誰れでもそんなものかも知れぬ。それがわかり出して来たらその人も既に人生の峠を越したことに気づくであろう。それは至極平凡なことだが淋しいことでもある。例えば、大学の一青年が一流の新

聞社に就職して、名刺一枚で大会社の社長

に会う。世なれた社長はそらさないで、この

青年を友人扱いにする。青年はいつか、自

分が偉らくなったように思うものだが、社

を辞めたが最後、面会を求めても、社長は

只今会議中ですと追っばらわれるものだ。

しかし若い頃にはこの間の消息は判らな

い。勢い社の顔を自分の顔と思ふ錯覚に陥

入り易い。大会社のセールスマンが、自分

の腕で、こんなに儲かるのに、こんなに僅

かなサラリーしか貰えないのはバカらしい

と独立して失敗するのも、多くは社の顔を

自分の顔だと思ふ錯覚から来るのである。

そうした若者の陥入り易い心理状態から来

る錯覚を汲みとるのが、この句のいのち

だ。

本を読む夫をにくむ悪女ぶり

(三窓)

夫が会社から戻る。夕食がすむと、恐ろ

しいようにして、サツと二階にあがって本

を読む。

それは妻にしてはまことに味気ない処置

としか受けとれない。

何の本を読んでいるのか、知らない

が、妻よりも、本の方が好きなのかと思

と、本が憎らしくなるのである。夫の留守

炭一つつげぬ男で社長なり

(圭井堂)

炭一つつげぬどころか、「オイ、そのタ

バコを取って呉れ」と命ずるのが社長であ

る。

「タバコぐらい、ご自分で取ったらいいで

しょう。そんなに忙しいんですか」

と、妻クンにたしなめられても、社長には

社長のいい分がある。

「オレがそんなことにアタマを使つていい

ものか。あなたには判らないだろうがネ。

そんな時間にもオレのアタマは事業の運営

策でいっぱいなんだ。社長と言うものは、

考える動物なんだ。考えたことはどんなサ

サイなことでも、他人に命ずるように出来

ているのだ。実行は他人がするものだ。判

ったかネ。だから、タバコ一つでも命じて

取らせるのだ。炭一つつぐ必要のないのが

社長だと、斯うである。

人情のかけらを拾うて起ちあがり

(潮花)

(潮花)

って来て捨て難い句なのである。だから作者自身としてはこの句を生活の一環として遺しておくのも意義があろうと思う。作者は定年退職者だ。普通なら、傍系会社の椅子にかじりついて、余生を送る筈が、眼を病んだために、元の技術面では働けなないので、趣味を活かして日舞の師匠になったのである。この世界も決して生優さしいとは言えないが、「人情のかけらを拾ろって」起ちあがったのである。

その勇敢さには筆者も同情の涙を禁じ得ないので、この句を買ったのである。「人情のかけらを拾ろって」とは巧い句語だと思

〔四〇〕  
銀婚はオイコラハイになっていた

(甲吉)

連れ添うて、二十五年ともなると、どことも夫の権利がのし上って、抜くことの出米ないものなるらしい。

男女同権、人権尊重、憲法がどう規定しているようにも現実には、「オイ」と呼べば「ハイ」と答えるのが世間並みで、それで結構家庭が円満に治まっていれば問題は無い筈だ。今更波風の立たないところへ、波風を立てる必要がどこにあらう。「オイコラハイになって」と気づいても、まあまあこのままで続けようとは銀婚を迎えた夫側の感想だと言えよう。

〔四一〕

お流れ頂戴座敷を抜き手切つてく

(生薑)

大物の宴会の末席を汚がしたので、このチャンス逃がしてはと、お流れ頂戴組が

殺到する中を、末席からつつつつと抜き手切つて、大物の前へピタリと座を占め、お流れ頂戴と手をさしのべた、その鮮やかなフロントウ振りのスケッチであるこの句は「座敷を抜き手切つて来る」の誇張法がヤマである。

〔四二〕

女優の野心裸をもちとわず

(弘道)

監督の心を読んだアクトレスは撮影とあれば裸になるのもいとわぬ。言うまでもなく裸になるのも主役への野心がネライだ。芸術の名に隠れて、裸を売物にしようとする女優と監督の提携が市場へ一本の映画を送り出すのである。

〔四三〕

定年を訪えばスクラップさと笑い

(涼人)

某月某日、定年退職者を訪う。彼はなすこともないので、日頃は妻クン任せだった花に水かけをやっている。

「タンマリ貰って、悠悠自適ですかね」と水を向けると、  
「なあに、人間のスクラップさ」と笑う。しかし、その笑いには何んとなく淋しさが籠っていたと言っているのである。

〔四四〕

芸者一代私生児だけ遣し

(好郎)

ズバリと芸者の一生にメスをあててあまたところがない。それにしても詩情がない稀薄だ。

貧家に育って、美貌を売り物にし、転転常なく、明暗の一生。遣したものは私生児

だけとは哀話のきわみだと言わねばなるまい。

〔四五〕

嘘をつくの文献を引用し

(晃)

昔から御用学者というのが存在する。時の権威者に媚びて、歴史までも書き変えられる。楠正成を褒め手切つているかと思うと、足利尊氏を浮かびあがらせたりする。どっかに嘘があることは言うまでもないのに、その嘘をつくのには、文献を引用するとはご念のいったことだ。

今に、東京堂あたりから、嘘のつき方辞典が出ないとも限らない。嘘をつくの真面目くさって文献を引用するが、その文献が、又怪しいものではナンセンスだと言うのであらう。皮肉な句だが詩情はない。

〔四六〕

靈柩車俺の乗るのもあれかいな

(多久志)

知人の告別式に行く。親戚知己の焼香が済む頃には僧侶の説経も終わった。やがて柩がかき出され、靈柩車へ運びこまれ、俾はゆるゆると動き出した。合掌して最後の見送りをした彼はつぶやいた。

「人間はいずれは死なねばならない。俺の乗るのもあれかいな。」

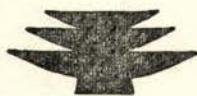
と、街角を今曲ろうとする靈柩車を凝視していたと言っているのである。

〔四七〕

ボスの顔知った日殺し屋殺される

(一傘)

こんなことは今にはじまったことではない。昔、宇都宮釣天井を城内に造らした大工を生かしておいてはタメにならぬと殺したのもいい例だ。悪い奴ほどよく眠むるといふ映画なども、大ボスは涼しい顔で、悪事をたくらみ、部下がギセイになって自殺するなど社会悪の一面をさらけ出している。ボスの顔を知ったが最後、殺し屋は虫ケラのように消されてしまうものだ。それとてもボスは直接手を下さない。端した金をつかまされて、何んの恨らみもないものを殺す殺し屋も人間のスクラップだが、いかにボスのためとは言いがたから、その殺し屋を消す部下も部下だ。この句は社会悪を十七音字で衝いた以外の何ものでもなく、そこには詩情のカケラも見出せない。



結婚式場  
長生殿

近代的な設備をととのえた  
関西一の結婚式場 貸衣袋も  
豊富にそろえております ●6階



大阪日本橋  
松坂屋  
TEL 631-1171



# 川柳塔

## 麻生路郎選

ブルジョア気分で銀座の灯をよぎり

鳥取市 河村 日満

キャンプでの生活にも似た妻の留守

湯豆腐へ少々吹雪くのも楽し

倉敷市 木村 千容

陸海 空惨禍頻度はいただけず

丸木橋架けるが如く河野いい

長老を煩すほど弱体化

倉敷市 田垣 方大

背広とは違う言葉のモーニング

退職金まず第一にホームバー

観光客海女の獲物を見てくれず

大阪市 木村 水洞

家康の狡さを学ぶ経営者

大物になると執行猶予つき

ゴネ得の手本を示す旧地主

純粹の善意持ち寄る裏長屋

米子市 小西 雄々

削っても美人になりたい顔をもち

生理日を変える薬で来たスキー

愛情の打診もされた贈物

大阪市 正本 水客

胸張って冬の太陽上にあり

こねどくにするなど他人のことだから

高槻市 若柳 潮花

灯を消して女の嘘で寝かされる

丸帯の音もテープは捕えてる

兵庫県 小西 無鬼

人間の軽さはお温泉ゆにプイと浮き

母なれや児の片言がよく判り

旅の宿

未だ解脱出来ぬかと溪水囁う

大阪府 西い わを

嫁ぐ前叱りもすれば宥めもし

大阪市 北川 春菓

ハンチング医学博士のゴルフ行こう

分業の世におしめ貸し業もでき

わが町のグリルうどんもそばも売り

父の日は別れた駅が眼に浮ぶ

口紅の色まで田舎噂する

ハワイ 羽佐間 柳葉

絵の上で馬を知ってる都会の子

昨日まで側近面で出入りして

丸出しのパートタイムマーが酌いでくれ

下関市 国弘 半休

引き当てのない孝行を養子がし

報告書私が悪いとは書けず

防府市 長野 井蛙

倅せは職場へ十年つゞく道

三面鏡寄る年波は拭きとれず

北風へ負けてはおれぬ体当り

岡山県 直原 七面山

バーのマダムに接吻一号もてゆかれ  
痛の記事を穴のあく程見るも年

成り上りの社長で裸踊りもし



大阪市 山川 阿茶

この家も墓も甲斐性のない腕で  
お塞銭浄財のみと云いきれず  
人づくり深夜喫茶をようやめず

加賀市 那谷 光郎

税金のやりくりついて基譜パチリ  
随筆家と信じていたら理博なり  
十田分肩を叩こかお祖父ちゃん  
暴力の見本のようにレスリング

大阪市 福井野 迷路

雪だるまさえ撫眉の島の内  
老醜か云い度いことも直ぐに出ず

岡山県 浜田 久米雄

お別れの言葉に腹の底が見え  
退職の金をなんべんでも聞かれ

出雲市 尼 緑之助

新国道都の風を持って来る  
春が来た電々公社に赤い旗  
反撥の音で過ぎ行く耕運機

晚鐘は鳴らず青い麦畑

春雷に軒を借りてるニューモード

京都府 大 鶴 喜 由

灯を消せば肉の姿があるばかり

停年が近く地面師ちよこちよこ米

三十は顔から四十は肌から見

愛きようより淋しみのある娘にひかれ

尼崎市 小林 文月

太閤園にて姪の結婚式 二句

二級酒も受けて嬉しい神酒なり

笙の音に咳を消されて安心し

門真市 福 島 鉄 児

無粋とはかくやノックもせず入り

聞かなんだことで平和はまだ続き

岡山市 服部 十九平

叱られているのに時計のねじを巻き

払わぬ気小理屈だけを言うて去に

反対をした顔来賓席にいる

岡山県 大森 娛 句 楽

年甲斐も無く働くと思はれるから辞めた

七曜に関係の無い身の軽さ

岡山県 田 村 藤 波

爪に火を灯した富と子は知らず

見島市 本田 恵 二 朗

不熱心な教師の方がもてゝいる

奥の手があるらし暴君まるめられ

堺市 高 崎 雄 声

お人好し他人の気持ちちは考えず

インテリ嬢もスキー服には弱かりき

岸和田市 高 橋 操 子

年中を胡瓜の青に支えられ

結構なくらしにあらす座りだこ

入学の予算へ母の衣裳代

島根県 藤 井 明 朗

新妻と別れ社用の旅重し

パトロール恋の二人を横目で見

倉敷市 野 田 素 身 郎

雪空へバス待つ二三分長し

ランドセル親の期待もいれて負い

芦屋市 丸 川 初 甫

眼は遠く山の起伏の雪を見る

先代をしのぐ若さで襲名し

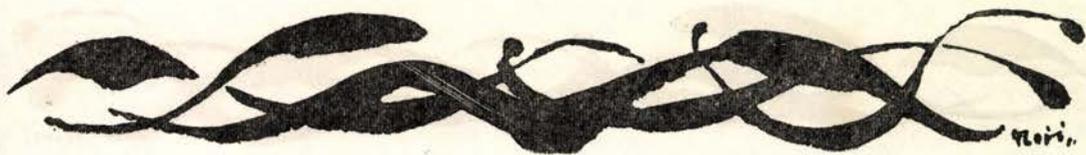
飛んで入る蛾にも似たり縄のれん

背の子にかかる覚悟で若返り

岡山県 池 田 古 心

時代から遅れる農業金を溜め

機械農担保に這入らぬ物は無し



大阪府 早川 清生

牡丹雪のことさら白くスラム街

葬列の縮んだあとへ棺が出る

上京

高名の書肆を神田の隅に見る

世田谷の畦ゆき下町からろんずる

大阪市 西出 一栄

久し振り傘修繕の声のどか

春の音椿の花がころげ落ち

雪解けへ靴墨の塗り甲斐もなし

求人へ釜ヶ崎から来てとちり

堺市 辻 圭水

私立でもいいわと親の気も知らず

春らしく合格発表してくれる

右総代我が子の成長たのもしく

加賀市 中松 恒雄

出火

血を吹いて病舎助けを呼ぶ如し

焼跡に煙くすぶるばかりなり

大阪市 児島与呂志

下見料だけで足りない下見に来

いやな奴又株自慢に来やがった

大阪市 橋高薰 風子

初恋のうすみずいろとなりけり

朧月芭蕉と蕪村連れ立てり

母の手をひいて砂丘の狐雨

山陰に埋み火のごと三朝あり

東郷湖夕日ところを得て沈む

下関市 中村 九呂平

おろすことばかり銀行日に疎く

養老院私はいやだと妻強気

種蒔いて三日は長い雨を悔い

にんにくを推めた妻は口にせず

奈良市 宮口 笛生

国鉄と云う処

正直に歩いて損のしづめなり

大阪市 西川 晃

何の異変ぞ恐妻の化粧濃し

詩のようなものを分裂症が書き

神戸市 仲どんたく

井池が舌巻く様な若社長

割勘で亡父の供養あい勤め

雲峰へ車内販売手を止どめ

平田市 久家代仕男

車中談秘書さえその法螺には呆れ

仲裁に来てから気付く無精髻

大阪市 本多 柳志

春彼岸信心と云う顔でなし

コマージュル飽かれた文字と気がつかず

内風呂が冷めてしもうた事件記者

出雲市 原 独仙

鮮人に似た顔損をしてる顔

子の似顔亡父が傍でねてるやう

文筆の達者な割に喋らない

伯備線点描

雪解けに何を釣るらん糸を垂れ

花咲けどまだ嫁かぬ娘が二人居る

就職へ叔父苦節談一くさり

飯省して誰か故郷を思はざる

西宮市 野呂 鶴汀

金が出来男嫌いの名を消せり

力つけてくれる姿に滝があり

年齢の差を宝石で埋め合わせ

西宮市 樋口 舟遊

異教徒へ美術としての聖母像

とは云えどネズミの道にねずみ取り



外套のはだけた胸に春は米ぬ

新潟県 高野むじな

兄の方が下請会社にい

冬山で死んだ写真が笑ってる

小判五千万田掘り出す

十田も出ぬ土地ばかり持ち合せ

広告の初給俺より余計取る

四 五人を見殺し満場一致にし

高砂市 吉原紅月

花の種蒔いて嫉心をまぎらわし

横丁に質屋の看板だけ目立ち

白鷺城これから稼ぐ姿なり

大阪市 石倉旅風

炭坑節詩情哀しく煙吐く

詩吟一年生(二句)

酒で荒れたばこで洒れたドレミファソ

幸之助よりも李白を吟ゼンか

大阪市 魚住満潮

続・西成界わい

半裸の表紙絵飯場誰もゐず

血液銀行換金の金握りしめ

スリの眼に桜まぶしく咲きそらい

どやに寝て国の行すえのみ思う

蛙の子は蛙旋盤工となり

愛媛県 村上旭童

耕耘機さへもやっぱり春の音

みち足りた顔は赤ん坊だけのもの

もう欲をすててよい高利貸

高槻市 傍島静馬

サクラ草大きなビルで売り尽し

ニューモード視線気にして読んでいず

潔癖な父に角帯よく似合い

男までサンマのような靴を履き

大阪市 河井庸佑

これ位できぬ自分をはがいがり

人の子という先生の弱さみせ

師のかけはふんでも車よけていく

大阪府 谷沢好祐

ベットシーンだけが映画の生きる道は

卒業式に警官の要る人づくり

長男はテニス次男は馬でした

出し方を調べて入れる預金箱

上げ膳下げ膳うれしい御婦人共の旅

青森市 工藤甲吉

天皇のファンが率先旗を立て

ロータリクラブを野人拜辞する

保守という言葉がいやな二十代

全裸シーンさすがに母は腹を立て

豊中市 林夢虹

耳の退化した人間達の祈る声が都会に

愛は熱きものなのかお前を焼いてしまった

大阪市 今西生薑

曲線と茂みを女利器として

百姓を浮き足にして地価昂騰

所得申告出せと気重い早春譜

一線が来たと老師の言淋し

京都市 室井八九寸

漁れた桜鯛の色も描き温泉の便り

岡山県 横山一声

新築を祝えば税金気にして居

湯の宿はちんばの下駄も気にならず

花便り家計も予算の追加をし

小松市 関戸宗太郎

愛されて愛する幸を孤児が知り

金バッヂ暴力団もつけていた

美濃市 安平次弘道



切るよりも切られる役にいる技術

晩成と親は思うたままで死に

宇部市 平田 実男

片言の長男へチャンネルをもう奪られ

主張押し通して重い／＼足

諫早市 川岡 靈眼子

年云うて叱るも親の慈悲のうち

ふんどしを故郷に飾る柵の海

貝塚市 杉本 一鶴

倒産へ社長はドロンきめたまま

タイミング悪く当り屋昇天す

富田林市 浅川 八郎

着物じゃないのに茶席へ強いられる

口紅に全神経を下肢お留守

岸和田市 内藤 きさ子

寒い日よ戸棚をあけても風が来る

夢の中私二十才で唄ってる

さかづきに嬉し涙の落ちる日よ

青森県 木村 凉人

理解してやれば人好しだと言はれ

唄で聞く支那でなかったカーキ服

倉敷市 奥谷 弘朗

当局に肩叩かれて迷い出し

小役人慾を忘れた顔で生き

兵庫県 遠山 可住

ストープまでたいて税務署待ちかまえ

大安の道一パイに荷がとどき

兵庫県 河原みのる

薄化粧夜の闇の雪はほめられて

豊作食之

かんらん一車農林省へブツケたし

姫路市 隠岐 不酔

子の卒業メッキリふえた顔のしわ

生家の親泣した鯉が空に舞い

鳥取県 清水 一保

廃校の庭にも桜咲きほこり

松江市 柳葉 鶴丸

愚痴一つ言わぬ女房の日記帖

めくら印でもまっすぐ押してあり

或る日フト千人針を身につけて

京都市 都倉 求女

一べつもせずに折込み痰を吐き

大阪府 松田 半月

乱暴を酔ふてましたととほける気

札幌雪祭

雪まつり雪の祭典造形美

今治市 越智 一本

お寺では食えずに保育園で食い

こみ上がる悲憤野菜は豚の餌

竹原市 山内 静水

金食してくれと言う娘に隙があり

僕一人ぐらい乗れそうな戸が締る

大阪市 森川 すみれ

口下手が云えば余計に誤解され

加賀市 細呂 木魯木

株なんか性に合わないやせがまん

新居浜市 小林 孝正

高知紀行(四句)

はりまや橋僕は彼女に何を買を

潮吹くサカナ居ぬかと宿から海が見え

高知城ガイドも入れて一つ撮り

五台山の展望フィルム丁度切れ

生死にかかわる金とはスリの知らぬこと

異母兄と知って話して見たくなり

合格欄子の名のあった日の笑い

合格欄子の名のあった日の笑い



# 小紫

## 富士野鞍馬

江戸吉原三浦屋の二代目小紫（濃紫）は、浪人白井権八（平井）と深く契り、共白髪を誓ったが、権八の悪事が露顯して、延宝七年（一六七九）十一月三日に死刑になったので、廓を脱け出し、目黒東昌寺の権八の墓前で自害して果てた。「久夢日記」には、

「爰に新吉原三浦屋四郎左衛門がかかえに、濃紫といへる三代あり、二代目こむらさき、賊平井権八にあいなれしが、権八悪事露顯ありてめしとられ、品川において御仕置に仰付られしが、由緒のものその遺骸を、目黒の里こもそう寺、東昌寺にほうむりて、一堆の主となしぬ。しかせし後こむらさきは、何気なき風情に苦界して、ある豪夫に親しみ、ついに請出され

ひよく塚みそかに月の出た所（『三四九』）  
などと、佐用姫や袈裟御前とも比べられ、その貞操ぶりを、

尋て墓へ来た人は小紫

（タル一四二〇）

小むらさき江戸の気性を立とをし

（『六〇二七』）

赤心の朱をば毎ぬ小紫

（『七八一〇』）

色に染み操をたてる小紫

（『一二三一九』）

実に色廓は紅と濃紫

（『九八一一』）

泥中の連は高尾小紫

（『六三三〇』）

泥中にはち高尾に小紫

（『八七二二』）

紫と紅葉晦日に月を出し

（『二二一七』）

と、万治の高尾太夫と並べてほめて川柳になっている。また、

紫は官女遊女で名が高し

（タル七二四）

と、紫式部ともならべられて

（『一一〇五三』）

恋塚は鳥羽目黒には比翼塚

（『八三二六』）

勤めにはまれなち塚比翼塚

（『一一二〇三』）

無きにしもあらず目黒にひよく塚

（『一六〇二四』）

小紫は、遊女として稀な貞女といわれ、「傾城に誠ないとは誰がいうた、目黒に残る比翼塚」とうたわれ、比翼塚は今に現存している。

鮮花を買って尋ねる比翼塚

（タル七一九）

と、目黒不動へ参詣して、名物餅花を買って帰りに訪ねる人も多かった。

比翼紋目黒辺からはやり出し

（タル二四二乙）

紫へ白く染ぬくひよく紋

（『一一〇九三』）

紫へ末世に白き名を残し

（『六〇一』）

浄るりや芝居では、白井権

八小紫として作られてあるの

（タル六八四）

江戸町の花むらさきは他所に

（『七九一〇』）

江戸町の水で仕立る小むらさ

（『九六一九』）

これはまた江戸の誇り紫染になぞらえて小紫をほめてある。

梅六は筑紫梅八小紫

（タル九八二八）

石川五右衛門の配下の筑紫権六と並べた語呂合せのような戯作もある。

### —著名作家の川柳句集—

# 新刊



浜田久米雄著

麻生路郎序

定価300円  
送費 50円

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪0681振替口座大阪75050

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★六〇〇部限定版につき「註文はお早く。」

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）



三條東洋樹氏

# 三條東洋樹とこん

## への注文

鈴木九葉

雪眼鏡はずし雪野を直視せ

り 塚田壯人

山口菊子選評の朝日俳壇にのつていた、この句を読んでいて、私は忘れかけていた謄写版のインクの匂いを突然思い出した。懐しいインクの匂いは私を四十年前へ連れ戻す。十七才の私に、校庭の隅で、川柳を作るようにすすめたのは三條東洋樹さんである。彼にすすめられていなかったら、私は恐らく川柳作家になつていなかっただろう。しかし、私が川柳作家になつていなかったとしても、川柳を作るのに使った時間を、もっと、意義のある事にあてていたとも考えられない。それで、私は自分が川柳作家のはしくれになつた事を後悔してもいなければ、彼の誘いを恨

んでもいない。

東洋樹さんは同級生であつた

し、一つ年上の川柳の先輩でもある。彼は中学生の頃から白髪が目立ち、何かにつけて老成した人で、発育のおくれた私はついて行く事が出来なかつた。猥談一つするにしても、落語のおちのようなものを若い時から心得ている人であつた。あれからの四十年間、お互いに言いたい事の言える仲であつただけに、私は時として不遜の後輩であつたかも知れないが、ある一線は越えないようにして来たつもりである。大正の末頃だつたと思うが、神戸の新開地にあつた米田書店で私が毎月買つていた「柳太刀」誌上で、東洋樹さんは峰月という雅号で活躍していた。

大正十二年発行の「川柳句集、淫

世帳」の頁を繰っていると、その

当時の事が思い出されて来る。

涼しさは青葉隠れに滝が見

え

峰月

放浪の故郷には妻子ある身なり

下宿屋の壁へマルクス名を

とどめ

これ等は十六、七才の時の彼の

作品である。

作句力の旺盛だつた彼は「柳太

刀」に句を出すだけでは満足出来

ず、大正の末から昭和の初めへか

けて、「羽衣」や「覆面」を同志

とともに矢つぎばやに出した。今

から思えば、「ふあうすと」創刊

の機熟するものを待ちわびてい

た動きであつたと言える。

東洋樹作品は常に私の身近かに

あつただけに、作品の正体も、他

の人々の作品の場合よりも、私に

は見やすかつた。青年東洋樹の作

品は、今思い出しても、謄写版のイ

ンクの匂いが強くする。その匂い

には、現代の東洋樹さんとの年令

の差だけで片附けることの出来な

いものがあるようだ。その匂いが

何から来るものであるかは断定す

る事は困難だとしても、現状不滿

から何もかを強く求めてやまな

い作家精神の激しさから来ていた

ものと、私は自分なりに解釈して

いる。当時の東洋樹作品の持つ格

調の高さを私は高く買い、自分の

作句の糧ともしていた。

菊地寛は社会的地位が高まると

ともに、純粹な作家活動よりは、

文壇の大御所としての政治力の発

揮が目立つようになって来た。晩

年の菊地寛が時々書く新聞小説に

は往年の激しい作家精神は期待す

べくもなかつた。東洋樹作品か

ら、いつとはなしに、謄写版のイ

ンクの匂いが薄れて来たのも、こ

れにどこか似ている所がある。彼

も「あさひ柳壇」「兵庫県警」

「こども川柳会」等を通して、川

柳の社会的進出の為に一役買ひ、

柳誌「時の川柳」を発刊して新人

指導に力をつくし、柳界に於ける

地位が高まるにつれて、指導者意

識の影響で健全な作句態度に終始

し、石橋を叩いて渡る人になつた

のは人間の常だといへ、大切な

ものを失ってしまったようで、惜

しまれてならない。

自殺したろうかと思ひ淫売

街の月を歩く 東洋樹

彼の家で夜おそくまで、よく、

語り合つた私には、この句（昭和

六年作）は懐しい作品の一つであ

る。彼が昔住んでいた家の近くの

鉄道線路沿いの道に毎夜淫売婦

が出たものである。月夜の淫売街

を歩いていても、この句のよう

に、格調の高い詩情を詠みあげる

事の出来た東洋樹さんは、作品の

上で、他人の顔色をうかがうよう

な所が少しもなかつた。彼の本領

は、私には、過去の作品とその延

長線上にあるように思われてなら

投句に選句に便利な

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊（五〇枚綴）三〇〇円  
送料（二冊分）二〇〇円

ない。

私は東洋樹さんを利己主義な人だとは思わないが、自己中心的な

人だとは思ふ。彼は人間の過去に於て渾石のだったし、現代に於てもそうだと云える。こんなことは他人がとやかく言う筋合いのものではないが、作品の上に於ても、いや作品の上に於てこそ、東洋樹さんは、もっと、自己中心的であつてほしいとも思う。彼はその地位から来る待遇を当然のものとして要求する事に躊躇しない人だけに、人間東洋樹のいく所、時として、塵埃が生じるが、考えようによつては、それだけ彼の存在価値があるとも言える。彼の行き方は、一部の人々には時としてブライドが高すぎるようにも見えようが、私はそう思う人々自身も色眼鏡をかけて彼を見ていないかを反省する必要もあると思う。好悪の情は人物批評の場合にも、作品批評の場合にも正しい批評の妨げとなり易い。川柳の社会的進出の爲にも、川柳作家はお互いに、もっと、暖かい眼の持主であつてほしいと思ふ。

東洋樹さんの第二句集「ほんとうの私」にたくさんの佳句のある事は言うまでもないが、そのよさは忌憚なく言えばテクニクの牙えから来たものである。完成品が並び過ぎているとも言いたくなくなる。臍曲りな私には、東洋樹さん

は本当の自分を過去の作品の中に置き忘れて来たように思われる。

一人の作家として、自分の過去の作品の中に忘れて来たものを取り戻す事を躊躇してはならない。日本人は外国人にくらべて、何かにつけて年寄り顔をしたがるが、川柳作家としての彼にそんな事をしつて貰いたくない。彼の中にひそむ可能性について、もっと若々しくあつてほしい。「ほんとうの私」の読後感を一言にして言えば、著者が作品世界に於て、自己中心的でないのが不満だという事になる。この句集を著者から贈られた私がかんな事を言うのは忘恩の譏りをまぬがれないが、こんな所でも心にもない事を言つても喜んでくれる彼でもあるまい。川柳作家は作品の世界では、もっと、自由奔放であるべきだ。わがままであるべきだ。スケート・リンクでころぶような所も見せてくれなくては物足らぬ。着つけのうまい人が襟もとをきちんとして、すましていような作品には私はついて行けない。東洋樹さんは他人に隙を見せない人ではあるが、作品の上でも隙を見せない。東洋樹作品に隙がないと言ふ事は常識の発達した人の眼がいつも感じられると言ひ換える事も出来る。

詩は体験から生れると言われるが、体験を詠むにしても、私小説的な筋を通し過ぎるのでは、作者の感した事や考えた事は伝達されても、一つの詩としての意義を小さくする。東洋樹作品は技巧の点では文字通り少しも無駄がないが、その無駄のなさが句柄を小さくしていると思う。彼には、な

んでも作つてやろうとする野心がない。試作がないと言つてもよい。彼の作品から気魄が感じられないのも、ここに原因があるのではないか。東洋樹さんには社会の出来事を詠んだ句も少くないが、その多くは風俗小説じみた解説の域に止つて、自分の生きる社会に対する厳正な批判精神が感じとれないのは、現在の私の受けとり方が浅いからで、多力者の眼から見れば、又別の受けとり方があ

るのかも知れない。

川柳作品に於ても、作者の個性のあらわれが尊ばれるのは当然だが、個性のあらわれだけでは満足し切れぬものがある。私達の作品は一人一人の作品群の底に流れる思想的立場がはっきりと受けとれるものでありたい。猫も杓子もマルクス・レーニン主義一色であれとは言わないが、一人の作者の作品を読んでいて、作者が真剣に何を考え、何を感しているのか判断に苦しむようなのでは、つまらない。「川柳人」「諷詩人」「和」

点の目につくものが少くないが思想的立場が鮮明なので、これを受け入れるにしても、拒否するにしても、後味がよかつた。この点、私達の作品には欠ける所があつた事を私は東洋樹さんとともに自己批判したいと思う。マス・コミをたよりに常識を身につけ、柳詠に眼を通して作句しておれば無難だった川柳家のうちで、心掛けのよいのが詩論を読んで、その受け売りをして得意になつていた川柳家の在り方に疑問の持たれる今日である。

「羽衣」や「覆面」が私の手元にないで、「ふあうすと」から東洋樹作品を少し抜萃してみよう。

春の人酔ふて虚空に蹴躓き (昭和4)

乳のまるみも女の強味 (昭和5)

手にとれば何の偉力もない (昭和6)

紙幣 (昭和6)

物騰る騰る小さき動め (昭和13)

愚痴を言ひ捨てて生活に光射す (昭和16)

山火事に関りうすく雨戸閉づ (昭和23)

論敵の死に老を知る朝の雲 (昭和24)

さびしさが解り贅沢ゆるし

とき (昭和27)

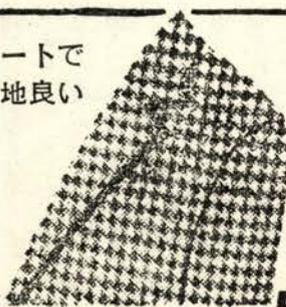
欲得もなしに大きな欠伸する (昭和31)

病妻の気弱さ叱る他はなし (昭和33)

支那ソバを恵み家出の子をさとし (昭和38)

「ふあうすと」の創刊が昭和4年6月だったので、各年の6月号の同人作品から作品を採つた。佳句ばかりをあげたわけではない事を附記しておく――

スマートで  
着心地良い



GOLDEN  
O.S.K.の  
紳士服

各地特約店に有り



# 川傍柳初篇研究 (一四)

丸十府 高須啞三味  
 岡田甫 前田喜代人  
 川端柳風 岡崎重義  
 藤井和雄 清博美

152 はやり医者者人殺すと忒人りふへ

泉河

前田||医者に患者がふえる繁昌ぶりを詠んだだけの句であるが、「殺すと」が皮肉であって、面白い。

藤井||「殺しても殺しても、患者が絶えない」というのは、真実である。風邪医者では、殺したくても、病気の方で直ってしまうが、重症患者を扱う医者には、死亡率も高いわけだが、それだけ患者の信用も厚く「あの先生にみてもらったら、死んでも不足はない」とまで頼られる。流行医だから重病人が来るので、殺すのも、あながち皮肉だけではないのである。

川端||最初は、墮胎かと思っていたが、確稿に賛。

高須||藤井説を面白く読んだ。論議者がいろんな職業人であることの重要さが、判った気がする。但し、この句がちすぎのいやみを感じる。

丸||異議なし。

岡田||藤井国士の説は、自己の体験を述べて、精細をきわめ、この句を一きわ引き立てた。真実の大切さを知るか、呵々。

藤井||皆さんの言葉を頂いて、恥ずかしい。私ごときは「門前雀羅、川傍撫柳」で、目下本論議に忙がしいに過ぎぬ。

153 色男してくれるにハこまる也

梅枝

前田||破礼句。「色男よんどころなく臼をすけ」と同趣向。この「色男」は、色事に夢中な男ということで、好男子、情夫ではない。意は明らか。

清||「色男」は好男子ととりたいたい。もてなければ「してくれろ」という女からの言葉が生けない。

藤井||「色男してくれ」と動詞化した場合は、性交そのもののズバリの要求で、好男子は問題外、男性ならなんでもよい。こんな言葉をとんてきに言えるのは、相模女に

違いない。一寸からかった女中に、積極的に出られて、迷惑顔の男が、目に浮かぶ。

高須||清説に賛。「色男」は、もちろん「好男子」で、女の口説を「してくれろ」と、俗にくだいて言ったのは、心の中の表現で、捨てたものではないが、本書にこんなバレ句があるとは驚いたものである。

いい男してやろうかと巖にかけ  
 (末二七)

色男好物もので責められる  
 (末二八)

色男食うにや足りぬと相模下女  
 (末四三)

柳雨本には「○○くれろ」と、伏字になっている。昭和二年としては当然。

丸||清・高須説に賛。  
 岡田||高須説肯定。

二月廿五日開

154 鼎舞ひを見さるなと初手ハさわぎ

一甫

前田||「鼎舞」は、徒然草に出て来る、仁和寺の法師が、鼎(物を煮たり、酒を暖めたりする器で、今の釜のようなもの)を冠って演じたという踊りのこと。舞の中でも、道化的なもので、その道に入ってから初めの方に習う。この句、習いたてのものが、得意然として、踊りさわいでいる、というのであろう。

岡崎||仁和寺の法師が、足鼎を冠って踊った(徒然草)時、後でそれが抜けなくなつて、胆を冷やすことになると思わず、初めのうちは面白分に、あれ見よと、大さわぎであつたらう、という句。

藤井||岡崎説に賛。「イヨ鼎ぶつさらひだと初手はほめ」と同意。「初手さわぎ」は、周囲の者が「見ろ見ろ」とはやし立てているのである。

高須||岡崎・藤井説共によし。「カナエとは、両耳・三足の銅器で、宗廟などの礼器」とある。

丸||賛。「鼎舞いを見さいな」は「大尽舞を見なさいな」の文句取り。

岡田||諸説に尽く。

155 江戸ならバ人死のある田植也

柳水

前田||住吉社の御田植えは、五月二十八日に各地とも行なわれるが、有名であるのは下関の住吉神社ほか沢山ある。神功皇后の三韓征伐御凱陣の時はじめられたと伝えられている。この句の田植えは、摂州住吉明神の神事で、その早苗甲乙女に遊女が奉仕したので、見物客が多かったという。この句は、江戸は物見高いこと故、人死にも

あるだろう、と言ったまでのもの。

(注) 下関では、五月の第三日曜日に行なわれ、豊具市が開かれ、その際やる田植えおどりは、県の無形文化財で、大変なぎわいである。

高須 II 「江戸ならば人死にのがある」と言っただけでなく、何か江戸にそういう事件があったからではないか？

丸 II 薩橋賛。高須説の事件は、考えてみたが、思い当たらぬ。やはり単に江戸っ子の物見高いことを言っただけであろう。

岡田 II 賛。

156 灸をあつがって関取笑われる

前田 II これだけの句、平凡。岡崎 II 強そうな関取が、灸を熱がる対比のおかしみ。

高須 II 「大きな身体の相模取」が「小さな灸」を熱がっている恰好を、傍の者がおかしがっている句で、よく話題に出る古川柳の一つである。

丸 II 既出の句にも

376 関取の恐々かける涼み台 (22ウ) があったが、大小の対比には、こんな句もある。

関取に赤子を抱かせ大笑い

岡田 II 賛。 (タル一四二五)

(10才)

157 能く見へる堂八方へ目を配り

菅江 岡崎 II 「能く見へる堂」は、東海道名所

図会に「能見堂 II 称名寺の西北にあり。擬筆山地蔵院と号し、本尊地藏尊を安す。今の堂は久世大和守源広之の建立なり」とある武州金沢の能見堂のこと。たぶん八角の堂宇建てであろう。その能見堂の擬人的描写だけの句。

清 II 賛。但し能見堂は八角ではない。同じ図会に「此の堂上に登りて遠望すれば、東南には安房上総の峰々眼下に迫り、近く見れば瀬戸洲崎の入江、汐くむ海人、藻を刈る賤女」と、その風景の広さと素晴らしいが、細かく説明されている。従って、ここでは単に素晴らしい風景をもつ能見堂を、擬人的に描写したものと考える。「此の堂上より風色の妙なる限りなく見ゆる故、能見堂の名あり」を見れば、句意は自ら理解出来る。

藤井 II 金沢八景の能見堂のそばには、筆捨松というのがあり、画家巨勢金岡が、この絶景に「筆も及ばず」と、筆を投じたと言ふ伝説がある。即ち「八方へ目を配り」遂に筆を投ぜざるを得なかった、絶景かなというところであろう。

丸 II 賛。「能く見える堂」に「能見堂」を利かせ「八方に目を配り」に金沢八景を利かせた、つまらぬ洒落の句。

岡田 II 賛。この作者が、狂歌で有名な朱楽菅江なのだから、全く呆れる。狂歌は理知の所産だけに、句までが同様になってしまっている。丸先生の言われる通り、実につまらぬ句である。

158 短命なくせに長びく病ひ也

鼠弓

岡崎 II 労働と言われたのは、肺結核ばかりでなく、恋わずらいのごとく、ウツウツとして来ますと云ったノイローゼ気味、性欲抑圧による気ウツ症なども、労働とされてきた。しかし、娘が大がいに十九歳の厄年ぐらいで死んだのは、肺結核であつたであろう。慢性だから長びく病気である。

清 II 労働の娘行年十九なり (タル一一) であろう。

藤井 II 死んでみれば十九では短命だが、病床につきまきりの三、四年は一進一退、一喜一憂、思ひ出の多い、思えば長い病気ではある。労働の表現としては随一。

高須 II 労働には考証句が沢山ある。

労働は忍び返しの内て病み

よくよくの事か労働笑うなり (タル一〇二〇)

男の労働五町でなおすなり (タル七三)

労働は長命丸が遅なわり (タル一七一八)

労働は大振袖病いの也 (傍三二七)

労働は逃げも隠れもせぬがもと (タル三三〇)

労働に母はおどけて叱られる (タル一九二二)

労働の妹はとうに縁につき (タル一二六)

前田 II この句「くせに」がうまい。 (タル六三七)

丸 II 本編にも (後出)

労働があるで寂しい難糸 (24才)

があるが、こんな句もある。労働のお袋やぼんやぼん (籠三九)

岡田 II 諸説に尽く。

159 首尾の松万民これを賞翫す

岡崎 II 「首尾の松」とは、浅草御蔵の四番堀と五番堀の間にあつた松の太木を、吉原通いの猪牙舟客が、そう呼んでいたものだが「万民これを賞翫す」は謡曲「高砂」の「始皇の御座にあずかる程の木なり」と万民これを賞翫すの文句取りで、吉原へ行く遊客が、今宵の首尾を下して、大げさにたたえたものである。

高須 II 川向いの松浦邸の椎の木と共に、古川柳には沢山詠まれている。

首尾の松あたり息子はゆすぶられ (タル一四三九)

首尾の松風さつさつと猪牙で行き (タル二二三四)

丸 II 賛。

岡田 II 古い画で見ると(本書でそういうものがお目にかげられるといひのだが)この首尾の松というのは、相当の大木で、枝が大川(隅田川)の方へはびこり、何本も杭を立ててその枝を支えている。名木として有名だった所以。

160 附士を入れますと断るけちな医者

菅江 岡崎 II 附士は付子(五倍子の粉)で、鉄漿に使われたことはお馴染みだが、医療薬としては「五倍子丁幾として、内服には腸

収斂薬に用いられた」(世界百科大辞典)らしい。その付子を「入れます」と、一々患者にことわって、もったいを付けているケチン坊の医者というのだから、特に高価な漢方薬でもなかっただろう。

清「「けち」は、ここでは「ケチン坊」の意味ではないと思う。医者を小馬鹿にして「ケチな医者」と言ったので、裏の意味は「そんなこと一々ことわる必要はないではないか」と言うほどのことである。

藤井「付子の粉なんか、安いものであろう。それを蜜柑の皮を「チンビ」陳皮」と称して、もったいぶったと同様、如何にも貴い物のように言った医者を「ケチな奴」と軽蔑した句であろう。今の医者は、保険外の薬を使うと「高価薬」と押印して、別に薬価をとる。セチ辛いのは今昔同様か。

川端「タイコ医者。自信がないから、口で一々説明するのである。

高須「素人が付子というものを知らないと思つて「少々附士も入れておきました」などと、モッタイぶった様子をする医者を第三者が見て「大人物ではない」小人物だナリケチな奴だ」と観察した句である。

前田「この句の「けち」は、ケチン坊、馬鹿馬鹿しい、つまらないを混同した感じを言ったものであろう。

丸「高須説の如く、さして高貴といったほどのものでもないのに「五倍子を入れます」と一々もったいをつけるのを、ヤユシたものである。

岡田「賈。妓楼などで、女郎に振られたのを「ケチな晩」という。ケチには、前田

説のように「馬鹿馬鹿しい、つまらない」の意もある。

161 あたりを急度見廻ハして文を出し

一 甫

岡崎「人目をばばかって、女に付け文する図である。「急度」を「きつと」と読まざ「さつと」と読んだら、句意がハッキリするであろう。「きつと」では、きつすぎると感じる。

清「この場合は、若い男女間の恋文と解したい。

藤井「春本でもいいが、やはり恋文だろう。「きつと」は、四辺を見回す瞬間で、きつすぎるとは思われない。発見されては一大事だから「きつと」あたりを見まわしたに違いない。

川端「藤井説に賛。あたりを見回す動作は、誰も見ていないことを確認して、手早く付け文を渡すため、と解したい。

高須「「渡す」か「読む」かだが、古句というものは、どういふものか、その辺をはっきり表現しない。今の人ならば、あたりをキツト見回して文を読みとするか、或いは

あたりをキツト見回して文わたしとするのだが――。しかし、ボクは「読む」方にとりたい。折角もらった文だが、読む所、読む時がない。だが、一刻も早くチャリとでも読みたい。ちょっと人のいない所へ来て、キツトあたりへ気を配って、

先刻受取った文を懐中からそと出す。そういう初心な女(男でもよい)の姿を詠んだ句と思う。

丸「高須説に賛。

岡田「「急度」は、幕府のお触れ書など法令用文にも盛んに出て来る言葉で、「急度守るべきこと」は「必ずしうっかり」の意である。だから、この句の「急度」も「さつと」の瞬間的でなく、よくよくしかりと見回してからの意。句意は、礎稿の「渡す」とも取れるし、高須説の「読む」意とも取れる。渡す文も、恋文の場合もあるが、小生は今まで、吉原の文使いが、遊女からの手紙を届けに来て、と解していた。どうであろうか。

162 ものいみで守護する鬼のきれっぼし

眠 狐

岡崎「「ものいみ」(物忌)とは、若干日の間、飲食、行為をつししみ、身体を清め、不浄を避けること、齋戒である。「鬼のきれっぼし」とは、謡曲では羅生門、太平記によれば大和国大森で、渡辺綱が斬り取った、指三本に、爪のかがまった、一面に黒い毛の生えた、鬼の片腕のこと。――

この鬼の腕を、渡辺綱から贈られた源頼光は、朱の唐櫃に納めて秘蔵したが、夜ごと恐ろしい夢に襲われるので、十七日の間、重い物忌をした。(その満願の夜、老母に化けた妖怪が、その腕を奪い返しに来る)

高須「歌舞伎では、渡辺綱自身が、三七日の物忌みをして、その「片腕」を守護したことになる。その「片腕」を「鬼のきれっぼし」と言ったのが、この句のみつけどころというだけの句、アザという言葉遊びにすぎぬ。

丸「高須説に賛。

品質優良

## 先カペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン  
タチカワゼム  
タチカワ画紙

大原市東区常盤町一丁目十一番地  
立川ペン先株式会社

岡田「高須説のように、渡辺綱自身を詠んだ句である。

163 十八ぐらいの鬼で八後家たらず

泉 河

岡崎「この鬼は「かげま」の異称。普通「かげま」は十二歳ごろから十七、八歳までの美童で、僧侶や武士相手の若道を勤めたが、淫奔な御殿女中や後家さんは、二十歳を越した年増かげまを「男娼」として買った。十八ぐらいつままでは、若すぎて物足りない、という句である。

清「鬼も十八だというはろくでなし(タル十三)と、後家も考えなくなるだろう。

高須「ウシロが使えなくなつて、マエの勤めと変わった若衆は、まだ後家さんを悦ばす術など知らず、後家さんは物足りない思いをする。この「たらず」は、その「物足りないさ」を言ったものと思う。

前田II「かげま」の十八が年増であることは礎稿通り。だが、この後家は、年増が物足りないというのだから、もっと若いのをほしがっているので、小生は礎稿とは反対に考えるが、どうであろう。

丸II礎稿でよい。

岡田II清氏のあげられた「鬼も十八」の句は「鬼も十八、番茶も出花」の俚諺で、不美人の形容だが、この句も幾分はその俚諺を採用して作っているかも知れない。

真中に一本生えた鬼もあり(拾九13) という句もあるが、男色を売る陰間を、なぜ「鬼」と異称したものか、どうも判然としない。陰間は女に接することがないから陰間を買いに来るような荒淫な後家には物足らぬ。即ち礎稿プラス高須説に賛。

164 せがきから帰って母は猪牙をとめ 秋江

岡崎II水陸一切の餓鬼に飲食物を供え、その功德で先祖の追善をする法会が「施餓鬼」で、七月の三十日間行なう行事。陸の亡者には寺院で法要したが、この句の「せがき」は、船を出し、川筋を漕いで、念仏をきかせた川施餓鬼である。この川施餓鬼

船には、大川の遊覧船吉野丸や川一丸が、一時借りられたもの、母親がその川施餓鬼から帰ってみると、どら息子は猪牙船で吉原へ行くもようなので、供養と遊興の不動慎なとりあわせを嫌って「とんでもない」と止めたわけ。また施餓鬼は大きいから安心だが、猪牙船はいかにも細く華奢で、いつひっくりかえるかわからない。母親が急に心配にもなったのだろう。

清II賛。折よくも土佐衛門が来て施餓鬼

なり(タル二十)

高須II丁度息子が吉原へ行くところではない。川セガキで猪牙船というものを見て帰った母親が、息子の吉原通いは止めないが「猪牙船はやめておくれ」と、礎解通り猪牙船をあぶながる、という句である。

前田II「帰って」という表現から、高須説をとる。

丸II高須説に賛。

165 遣手の顔も三度来りや柔和也 眠 狐

岡崎II遣手婆は意地悪で、業つく張りときまっていた。吉原では、三会目には、この遣手にも一分の花をやるのが定法であった。平素吉虫をかみつがしたような遣手婆の顔も、現金なもので、この花を貰った時だけは、柔和になるという句だが、俚諺「仏(または地藏)の顔も日に三度」を利かしていること、言うまでもなし。

高須IIその頃のこと、吉原の句も多いが遣手の句も多い。少しウツザリである。憎まれれば一軒に一人ずつ (タル一八9)

あいわつちや鬼神さんなど遣手言い (タル九18)

ばばア笑った晩帯をとくなり (タル一六38)

丸IIその通り。

岡田II賛。礎稿、俚諺まで引いて文句なし、敬服。

166 ま、母の留守に梓の声がする 鼠 弓

岡崎II「梓」は「梓巫女」の略。市子ともいい、梓の木で作った弓の弦を叩きながら、俗にいう口寄せ(死霊または生霊を呼び出して、その思うところを代わって物語る)や神降しなどをした。継母の留守に、その梓巫女の声がするというのは、梓巫女を呼んで来て、死んだ実母の口寄せを聞いているのである。継母に気兼ねして、その留守を幸い口寄せである。

川端II賛。平素のママ子いじめが、思いやられる。

高須II気弱な、内気の子ママ娘が、ママ母の留守に、そっと生母の霊を呼ぶ、いじらしい句である。

丸II賛。

167 から汁を喰く下駄の咄也 五 鳥

岡崎II「から汁」とは雪花菜(きらす)汁で、豆腐のオカラを入れた味噌汁。また「下駄」というのは、三浦屋の高尾に迷った仙台侯伊達綱宗が、吉原通いにはいたいた伽羅(熱帯地産の高貴な香木で、インドでは釈迦像を刻んでいると伝えられる)製の

下駄で、綱宗が吉原通いの途中、京橋のあたりで(高尾が近々身請けされると知った情夫島田重三郎によって、差し向けられた)殺し屋浮世渡平に襲われた、という俗説(伊達騒動記)にもとづいた句である。辛うじて難をのがれた綱宗が、目についた豆腐屋に入って、一杯の水をもらって、ようやく一息ついた。その札に、綱宗は伽羅の下駄をおいて行った。こそで、その朝の豆腐屋の店先は、噂を聞きつけた人々の群

れで、大変な騒ぎ。

下駄を見せねえとくらずを買いに来る (タル一〇28)

という有様。その連中が家へ帰って、買って来たキラズでつくった「から汁」をすりながら、伽羅の下駄の噂ばなし、をしっているというのである。

高須II本編にも(後出)

311伽羅へ穴六つあけても歯がたたず (タル158)

なんて句が出て来るが、

下駄を見に入らぬ豆腐を買いに行き (タル四13)

という類句もあり、

下駄屋でもよっぽど伽羅を盗むなり (タル158)

などというタロウ句もある。

丸II二説に尽く。

岡田II同。

川傍柳初篇研究(一)訂正

14頁下段10行目「フトコロには」ハ「フトコロは」

15頁三段8行目「地幅を誇いだ」ハ「地幅を誇いだ」

16頁二段4行目「この中」ハ「その中」

同 三段10行目「岡野」ハ「岡崎」

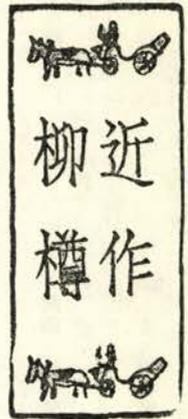
同 同 32行目「高須」ハ「高須」

17頁二段23行目「可哀想」ハ「可哀想」

(一三)訂正

17頁三段16行目「寸成女で」ハ「寸、成女で」

同 17行目「三寸五分という」ハ「三寸五分」という



麻生路郎選  
北川春巢選

徴用で行った工場へまだ通い 竹原市 杉原 愛場  
 だしぬけに一升さげてくるも春  
 これでもかこれでもか 春の脚線美 同  
 郊外へゴミ捨てにゆく自家用車 同  
 仕事場の一輪さしへ蜂がくる 同  
 停年はないが職人ガタがくる 同  
 おとしよりに席を譲って舌出す娘 倉敷市 水谷 谷水  
 入学金ばかりは滞らせとけず 同  
 寛容の精神ですのとのろけられ 同  
 子守とはみじめなものよ中年の 同  
 落目には落目の様な 税吏来る 同  
 デイトもう土産持たさず見送られ 枚方市 宮川 珠笑  
 辞める気の反骨社長に認められ 同

嫁ぐ気になれば世話する人が来ず  
 星の名は判らなくとも良い二人  
 うちの娘に過ぎる花婿もて余し

交通事故で臥す

見舞兼勧誘保険屋飛んで来る 香川県 三井 酔夢  
 歳月のさとり凡妻凡夫よし 同  
 置物の如き妻の座固守する気 同  
 病窓に見舞飾って見栄を張る 同  
 切手ブーム孫の手助け列に居る 同  
 冷戦を病欠にして見舞われる 新居浜市 安藤 桂仙  
 盛り場に能ある女爪を染め 同  
 理屈云うくせにおしっこまだ云えず 同  
 金溜めてえにし糸も細くなり 同  
 ホタルの光初恋も卒業す 西宮市 末沢 花美  
 スイトビー活せ乙女のまま老ける 同  
 道徳を忘れきれずに燃えぬ恋 同  
 ビーナズにポリウム 石井は勝てません 同  
 ほおかわり俺には俺の田圃あり 仙台市 平野 光道

現代柳人録



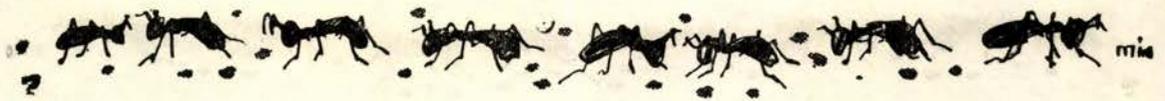
(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号  
 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六)  
 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)  
 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の  
 趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)  
 川柳に手を染めた年月

253 田中鳥雀

(一) 田中英雄 (二) 鳥雀 (三)  
 多数あり (四) 京都市上京区相国  
 寺北門前町上の町 (五) 明治三十  
 一年七月二十二日 (六) 京都市上  
 京区護国神社隣 (七) 銀行及手形  
 交換所勤務 (八) 無 (九) 未だ自  
 信句なし (一〇) 主として煙霞  
 (一一) 有 (一二) 大正末年頃、

254 工藤甲吉

(一) 工藤礼作 (二) 甲吉 (三)  
 (四) 青森市金沢一〇〇の四  
 九 (五) 大正二年十二月八日 (六)  
 青森県南津軽郡尾上町高木 (七)  
 新聞社員 (八) ②七六六六 (九)  
 十二時に寝た母いつか起きてい  
 る (一〇) — (一一) 有 (一二)  
 昭和四年一月



異動期を無事に過して元の俺	同	鼻唄を歌って泣きたい気をおさえ	羽野野市	稲本 凡子
広告を二割信じて葉のむ	同	逢いたくて逢えば映画と株の事	同	同
おごられに出る財布たしかめて	同	一人米て池のアヒルを見て飽かず	同	同
知恵借りに来たのに酒でもてなされ	玉野市	おとぼけが上手になって世帯じみ	兵庫県	常岡 孝風
自分にも勝てないくせに勝負好き	同	トップ屋の死へ残酷は金のこと	同	同
十人の部下より妻をもて余し	同	わたしも被害者ですよととほけてる	同	同
塵一つ無くて客間で肩がこり	同	叱られた人が恋しい夜をひとり	京都府	大久保 和三郎
大仰に欠伸している役不足	岐阜市	きしむ襖も虫の居処	同	同
大門を叩いて木戸をくぐらされ	同	色の灯にギター妖しきリズムもつ	同	同
なり振りにかまわず貯めてくり遊ぎ	同	名曲も疲れの回る喫茶店	大阪市	山田 李鳥
余程暇らしく骨董屋をのぞき	同	上向いて歩けば飲めのアドバルン	同	同
停年へ私立頭 脳が眠らせず	大阪市	腹を塗るわが世の春の貸ボート	同	同
粒々と貯めて私学にたてまつる	同	睨まれているのを背の巾で受け	玉島市	水粉 干翁
誰に似た頭で喧嘩の種になり	同	ひっそりと有り余るほど持て住み	同	同
退職金父母の石碑の予算入れ	同	こどもではないと他人に教えられ	同	同
預った子供に困地面白い	奈良市	子がるな育ちバリカン錆びている	青森県	岩淵 一星
編むものが無くなれば又ほどいてる	同	誘惑に勝てず二月のチューリップ	同	同
観光都奈良も五輪の道を掘り	同	愛妻の機嫌は寿司でもちなおり	同	同

(255) 仲 どんたく

(一) 仲忠博 (二) どんたく (三) 忠博 (四) 神戸市灘区高羽橋丘一〇一 (五) 明治四十三年七月二日

(六) 神戸市 (七) 会社員 (八) 建築士 (九) 滞絡める

音できまった立姿 (一〇) ダンス、絵画、観劇 (一一) 有 (一二) 昭和三十年一月

(256) 川 竹 松 風

(一) 川竹正哲 (二) 松風 (三) (四) 高知市水国寺町一八、

(五) 大正十一年五月十六日 (六) 高知市安芸市川北 (七) 飲食業 (八) ②一四三一 (九) 家で

せぬ笑顔バーの隅で見せ (一〇) サポテン、小鳥 (一一) 有 (一二) 昭和十五年、海軍入団で中止、昭和二十八年再、

車

# 福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四四番



山焼きを見る顔顔がもえている <small>富田林市</small>	吉岡 美房	吐息まで入れて流行歌も春	同
自家用車もって赤旗振る教師	同	花の去年の酔を話題にし <small>岡山県</small>	永宗 宗義
校庭で生徒を轢いた人づくり	同	伴せを一人占めして娘は嫁ぎ	同
吉田茂氏訪台	同	麦の青負けてはおれぬと草の青	同
東洋の頑固同志の話し合い <small>大阪市</small>	和田 旋鳳	免許証荷にならぬからとれと云う <small>大阪市</small>	川口 弘村
嘆かわし世相をうつす変り難	同	ご遺徳はホステスも来たご会葬	同
街ぐるみ銭を使えと温泉郷	同	お隣りの番犬が死んで不安がり	同
必要とあれば墓地でもあばくなり <small>鳥取県</small>	鈴木村 諷子	予備校が増築 <small>鳥取県</small> のでファイト出し <small>鳥取県</small>	青山慶之助
平凡の伴を知るおみそ汁	同	刑務所が立派に出来て祝賀式	同
心太を突けば心太が出る	同	春を呼ぶ <small>羽咋市</small> ですよと買わされる <small>羽咋市</small>	三宅 ろ亭
大学をすんでも婆ちゃん僕と呼び <small>高知県</small>	山川 勝子	選ばれて貧乏くじを引いており	同
恋人でも探そと母をおびやか	同	合併後農場お初にビルを建て <small>空岡市</small>	谷本鈍愚坊
叱る子もなくて何時迄共稼ぎ	同	歟の柄に残る先祖の汗あぶら	同
眼の小皺まぎらすための眼鏡にて <small>岡山県</small>	阿部 良江	ごみ焼の煙も春の色にとけ <small>見島市</small>	伊丹柳瓢子
どっちみち言 <small>おん</small> ついでに腰をすえ	同	灸すえる部屋ストープに <small>おぼろ月</small> められ	同
老母には左遷をされたとは云わず	同	おぼろ月 <small>羽曳野市</small> こころの帯を解いて逢い	古川 静波
子のテレビとれば税務吏 <small>おこり</small> <small>パロアルト</small>	齋藤 流路	更生のチャンスに故郷の母が近き	同
ハツタリに弱き女よ 賈 <small>ダイヤ</small>	同	よい嫁とほめられ朝は四時に起き <small>兵庫県</small>	齋藤たけお

(257) 川岡 靈眼子

- (一) 川岡光雄 (二) 靈眼子 (三) 風情 (四) 諫早市天満町一、二、九七番地 (五) 明治四十年九月二十五日 (六) 佐賀県鹿島市高津原町三七七九番地 (七) 千里眼 (宗教靈眼視) (八) 事務所諫早五三九番自宅諫早一四三七番 (九) 尻の尾のないがましの人間か (一〇) 読書、著作、骨董 (一一) 有 (一二) 昭和十三年十月大阪で麻生路郎師に風情の身で師事す、

(258) 樋口 舟遊

- (一) 樋口祐一 (二) 舟遊 (三)

肩こり・神経痛  
筋肉痛・腰痛  
疲れ目・便秘に  
●アリナミン  
●経典性アリナミンF  
気管家の 活性持続型ビタミン  
**疲れ! アリナミン**



## 句評

## デイスカッション

四四二号川柳塔より



出席者

早川 清生  
西川 晃  
林 夢虹  
橋高 薫風子  
河野 春三

気ままに歩いて禅寺のただ白く

水客

夢虹が今考えている事柄がこの句に多分に含まれている。その一つは破調ということである。表現形式は内容により規定されるということ、そういうことからその作者の表現上の立場が問題になってくる。水客氏の立場を先ず考えて見たい。それで、自分にはこの作者の立場が少し判り難く批判し難いが、この作者の特徴である感覚的な鋭さが多分に出ている句と言える。この句の出来た時、作者は何も心に持っていないから、その事実は歩いて見た時、禅寺のただ白くという表現がひょいと出て来て、禅寺の幽玄を把握したのでは

なからうか。又、この場合、この句を破調にしなければならぬと断定した。「海晦れて鴨の声はかに白し」の芭蕉の句を思い出させた。晃のこの句は果たして破調だろうか。清生は厳密に言えば八五五型で破調と思う。東洋的な枯淡の句で成功と思う。

夢の作者は「気ままに歩いて」を特に強調したかったのだからと、思う。それが「禅寺のただ白く」を強めることになった。晃のおそらく実感そのままだと感動を失ったような作者の空虚な心の状態がうかがえる。虚無的な懐疑的な感じの強い作品だと

思う。作者のかつての句に、石塔の白さのなかに白い蝶というのがあるが、深く印象に残っているのだが、作者は白というものに対して常人にない鋭敏な感覚をもっているらしい。この作品も主体をなすものは下五の「ただ白く」である。夢は私はこの作品には禅寺の虚無的な感じを感じられない。薫風子も私も虚無ではないと思う。鋭しい寂寥感、索莫さだと思

う。思惟的ではなく感覚的なものだ。晃の前述の「石塔の白さの中を白い蝶」の句の白と、この「ただ白し」の白とは密接なというより同じ心の底から出て来た白と思

清晃氏の言ったようではなく、作者の人生の一コマの感慨というか、複雑な社会生活の中での一時の放心、それだけのものではなからうか。

晃のその放心の内在于る潜在意識に虚無があるので、これら二つの句が生れたのではないかと私は思う。

薫「気ままに歩いて」の語句は禅寺の厳しさにはふさわしからぬニュアンスを持つが、下五を「ただ白く」と結んだので上の語句が生きて来た。鋭しい寂寥感を「ただ白く」と表現した作者の表現力はすばらしいが、最上の表現かと言うと一抹の疑問も残る。

晃の前述の通り作者は白に対して他人の窺い知れぬ鋭い感覚を持っているものと想像される。

薫「白」という一語で、私は竜安寺の石庭の白砂のたまたまのよ様な感覚を想起したのだが、それにしては、「気ままに歩いて」の語句が不適当になってくる。だから広い境域の宇治の万禪寺のようなお寺での感慨だろう。

夢「この白には宗教的な安らぎを感じとる。その安らぎは、故郷に帰って肉親に逢ったような安らぎよりもっと深い宗教的な安らぎ、そういったものをちらっと感じた。

清「私は逆のことを感ずる。言外に禅寺の現在の無力さと言う

か、巨大な遺構にも拘わらず、現代宗教の無力さ、救いのない現実感をこの白に感じる。

薫「それは大分理に陥ちた考え方のようですね。

晃もう一言つけ加えると、この白には鑑賞者の全面的な理解を拒む作者の独自の感覚があるので、これ以上詮索しても無駄だと思

う。薫「私は、これは「白ける」「しらじらしい」に類する白で、外平凡な白だと思うので余り買わない。

春三「大体言い尽しておられるように思う。「石塔の」の句は知らないが、二月号の、「人生を考える時釣皮がある」の句を見、「気ままに歩いて」の句を見て、夢の最初の発言から解決して行こう。この句は二段切れにはなっていないが、破調だと思われぬ。内容から形式が定まるといことは大切で、誰もがそうあるべきであると思う。何もかも五七五型にあてはめるといことは危険だ。この作者は、そういう心得を常に持っておられる方と思う。この禅寺は森閑とした大きな名もないありきたりの荒れた禅寺と考えられる。石庭などは「気ままに歩いて」の語句から考えられない。白さということについて意見が分れた。虚無的なものが底辺にあると

いう見方、幽玄だという感じ方、感覚的だが案外平凡だという見方に分れた。芭蕉の句の白は象徴的な白で、その点ではこの句の白は大分に弱い。「ただ白く」がこの句の焦点だが、この「ただ」は安易ではなからうか。

夢II「ただ」を抜くと白さは強調されるが、「ただ」には作者の感懐が深く表現されていると思ふ。

清II私もそうだと思う。その時の作者の心理状態が感じられる。

春II「気ままに歩いて禅寺の白く」とするのが良いと言っているのでない。「ただ」という二字を今少し吟味すると、先に晁君の言った内在する虚無感ももっと深く表現されたのではないか。晁君が挙げた「石塔の」の句などを見て、この作者が虚無感とまでは行かぬものの、内在するものに白に対する鋭い主観が窺える。「石塔の白さのなかに白い蝶」の句の白の方が数等深いことは言うまでもない。

階級意識は包み紙にも

日 満

晁II私が世間知らずのせいだと思ふが、自分の経験にあてはめて、此の句がどうもピンとこない。だから、私は、宮内庁御用達とか天皇陛下献上とか書いてある土産物等の包み紙を想像するが——もしそうだとすると、それは階級意識と言うよりも、事大

主義、或いは権威主義といった方が正確ではないかと思ふ。この句の場合の階級意識をもつ実体は何か。又、その実体と包み紙とはどういう関係になるのか。良くのみこめない。

薫II宮内庁とかいう至極特殊なもの包紙とまで考えずとも、もっと一般的な中で高級店、例えば三越とか、高級専門店位の包紙と解釈して妥当だと思ふ。

清II私もそれでよいと思ふ。そう考えただけで、高級店でも一般庶民を対称にしなければなり立たない世の中となったのだから、その包紙を持つていふと言ふことだけで、階級意識を抱いていると見るのは、実際には現実ばなれがしているようにも思ふ。作者の言わんとすることは理解出来るが——

夢IIこの句は余り成功していない。高級店の包紙を持つていふ立場からの見方ではなく、持つていふ人間を見て劣等感を感じている方の人間の立場から表現したものと解釈する。

そして、「包み紙にも」の下旬は余韻のある表現のように見えるけれど、そういうものは皆無で詩的なものがなにもない。

薫II人間心理、殊に女性心理をえぐる句だから詩的なものは要らぬ訳だ。八五型の単的な表現はその点可成り成功していると思ふ。

晁II包み紙は諸君の説明でよく

判った。夢虹君は余韻余情のない句のように言われたが、

私は努めて善意に解釈して、階級意識と言ふような大袈裟な表現を使ってユーモラスな効果を狙っている作品として鑑賞すると、とほけた味があつて面白と思つたのだ。

清II薫 そんな感じは全然しないよ。

夢II先に劣等感といったが、そこから出て来た感情的な句のよう

だ。春IIこの句には表現の上で大きな欠点がある。この意識は川柳以前のものだから、これを根底にして、もう一度この素材を詩的昇華して欲しい。夢虹君が劣等感云云といったが、階級意識という打出

しからいうと、下層階級の側から見た場合コンプレックスの問題でなく、もっと深く「人権尊重」や労働者の「生活保障」「民主主義の確立」というようなことから対抗意識が生れるので劣等感と片付けたいけない。僕は、ただ包み紙にも高級なものからハトロンまであるのだからそれをもっている人を見て階級意識を感じた作者は怒りを覚えたのだからと解釈するが、それを余りに生に表現し過ぎたので人の胸に訴えるものが少なくなつた。素材のままに放り出されてあるので、これを昇華させて欲しかった。併し、批判句の少ない場

で、この句のような作品は存在価値がある。

薫IIこの作者には「労働歌重役室の窓閉まる」のような佳句があります。常に批判の場に於て鋭い観察をしておられる作家です。

春II作者が労組の委員長をしておられると聞いて僕は尚更作者の意識を買つての話だ。

青い海へ貧しい村がみつ

清生

薫IIこの間山陰へ旅をしたが、車窓はこういう光景の連続だった。この句を知つた後だったので、同行者にもこの句を披露してその感を共にした次第です。

晁II大都市の周辺にはもう青く澄んだ海はない。此の句は、現代の社会から孤立して頑固に慣習にしがみついで貧しく生きる僻地の漁民の、生活と慣習の中に自足して生きる人間の哀しさを客観的に表現すると同時に、現代の社会の在り方に批判を加えて、知的に周密に構成された句だと思ふ。清生氏の特徴が良く發揮された作品の一つであると思ふ。

夢II晁さんの発言は適切ですが、現代社会の在り方に批判を加えているといわれたことは、私には感じられない。そして、この句は非常に詩的だ。その原因は、青い海と貧しい村、これが厳しい詩情を持たしめた。唯、しがみつ

る。正にこの通りなのでしようが、もう少し青い海と貧しい村にふさわしい表現が欲しかったと思ふ。

薫II私はこの「しがみつ」がこの句の手柄になっていると思ふ。これが、句を甘いものとせず、ひきしめたのだ。擬人法の成功した句だ。実感そのものなのだ。

夢IIそれが実感であるが故に、逆説的に実感でない表現がして欲しかった。

晁II夢虹君の言うように「しがみつ」にはやはり何か安易さのようなものを感じる。

春II薫風子君の言うように「しがみつ」が生命だと思ふ。一句を通じて、詩的な道具立てではあるが、それよりも「しがみつ」に言わんとするところがあつたと思ふ。ただ「しがみつ」の言葉が卑俗なために、上の表現に対して、夢虹君の言う抵抗を感じるということ、それも判る。併し作者の意図からすれば、「しがみつ」を離しては、この句は意味がなくなるのではなからうか。

清II薫風子さんの言われるように島根半島の印象の一つです。唯それが、一つの印象に止つたのは残念だ。都市との格差の所謂農村以上の貧しさを持つ近海漁業の漁村の生活を鋭く詠い上げたか

た。

悲しきは少女に飛べぬ溝があり

夢 虹

清川夢虹さんらしい句だ。象徴ということも感じられるが、作者の境涯を考えると、自らの無限の感慨を有形なもので直観的に表わした主情の濃い作品と思う。

唯、「悲しき」という言葉に抵抗を覚えた。この場合、文語口語を混えた構成は感心しない。「悲しき」は文法的に難があるのではない。勿論、殊更文法に外れた用い方をすることもあるのだが……。

鬼川抽象的な句に抽象的な批評が出ましたね。このような作品の鑑賞は一つ違ふととんでもない見当違いの見方をすることになるの怖いのだが……。

この句の少女は、清浄無垢なるものにあこがれる彼の心のある面を具象したものと惟う。

聖なるものを信するが故に、現実を肯定し得ない作者が、自分と社会の間に越えがたい溝があることを強く意識して歎いているのでしょう。少女という言葉からして、作者の性に対する罪悪感のようなものもふと感じるのだが、その場合この溝はセックスかも知れない。何れにしても彼がかつて少女趣味と批判されたような浅い感傷ではなく、もっと深い生命がこの作品にしみとおっているように思われる。然し、観念的でありすぎて自分が溺れているような感じも少し受ける。

薫(精神的、或は肉体的)の溝を

言っているのかとも一応思えたが、そう考えるよりも、少女の童心そのもの、純な心象を哀れと感じて詠った句と単的に受け取る方が私には好ましい。それでこそ、「悲しき」が最も純粹に澄んだかなしみとなつてくる筈なのだ。

鬼川「悲しき」は適切と言えぬかも知れぬが、清生さんが反対されるようには思われぬ。作者が若し改作するならば、「悲しきは」全体を他の表現に変えるべきだろう。

春「悲しきは」は絶対に動かさない。ロマンチスト夢虹が、この句では案外にロマンチストの甘さを脱却させている。溝はただ普通の溝と解釈してよろしい。勿論、その背後には作者の「溝」があるが、余り偶意的に解釈せぬ方が良。 「悲しきは」という文語が口語体の中に交るといふことは、必然性のある場合は構わぬと思う。

「悲しきは」といふような言葉は乱用してはいけないが、この句の場合には動かせない。

鬼川勿論句の表面に表現されたものを先ずそのまま受け取ったという前提のもとに発言した訳です。

夢川自分の作句の方法は、或る意識を表現するときに、具象化されて表現されなければならぬと考えています。つまり感情移入です。この句の場合、私は自分自身の限界というものを見つめた訳で

す。「それが「溝を飛べぬ」とい

う表現となつたのです。さて、「溝を飛べぬ」ということを表現するのに「悲しきは」という言葉を使いました。私のつもりでは、この「悲しきは」の言葉の中には、悲しくて悲しくて仕方がないというようなものではなく、一種の甘えといったものを含ませているつもりです。人間に限界があると言ふことに一つの甘えを感じるのです。これを、少女が溝を飛べぬと言ふ表現にしたのは、それは私の持つ、内在するロマンが顔を出したと言える訳です。現実には少女に飛べぬ溝があるということ、私の具象化なのです。

春川僕は作者の通り考えるから尚更、この「少女」をロマンから出て来た少女とは思えないのだ。夢川ええ、たしかに少女が私に内在しているのです。

春川もう時間も相当経過したのでこの辺で今回は切りとしよう。批評の対象としてはこの四句の外に「元日の炎見つめて思うこと」内藤さき子と「巡回の線路に人形落ちていた」大江秋月の二句を用意していたが、時間切れとなつたのは残念である。

「川柳雑誌」では句評リレーなどもやっていたが、これはやはり一同に集まって、他の人の意見をきいて更に自らの発言を加えてゆく方がより研究が深められるので、当分このメンバーをレギュラーとしてやって行きたい。

四氏とも誠に真剣にデイスカッションをやってくれたので、僕が特に発言する場がなかったくらいであった事は嬉しいことだと思ふ。

路郎主幹から昭和初頭にやった月評会のようなものにして、そのしめくり役を君がやってくれた事であったが、しめくりの不要なほど四氏が妥協なく真剣にやってくれたことは今後が楽しみです。

路郎主幹から昭和初頭にやった月評会のようなものにして、そのしめくり役を君がやってくれた事であったが、しめくりの不要なほど四氏が妥協なく真剣にやってくれたことは今後が楽しみです。

(四月八日、薫風子整理)

ご利用下さるに答へる

あなたの句帖が再版  
されました



一人一冊素晴らしい句を

★路郎好みだけに、すばらしく気がついてきます。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊八〇円  
(送料別)

発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目二五  
電話 大阪 6081  
振替口座 大阪七五〇五〇

続

川柳書架

(37)

句集の巻頭には京都柳増の元老であった斎藤松窓が簡単に人物紹介を執筆している。なお富士子句集の巻頭には古老福造が筆を執っている。

柳舟・六好・富士子句集  
★本句集は川柳叢書第六編として柳舟・六好・富士子の句集を合纂刊行されたもの。柳舟句集及六好以後。

★柳舟(池田徳太郎)の句は「紙衣」より自大正六年三月至大正九年中。「擬宝珠」其他―大正八年一月、大正十五年、「紙魚」以後―自昭和三年至昭和六年。  
★六好(吉田新蔵)の句は「紙魚」「擬宝珠」「楊柳」其他―自大正八年至昭和三年末。昭和五年以後。  
★本句集は大正昭和時代に活躍した京都柳増の中堅作家であったが

★富士子(西山富三郎)の句は紹介者の筆によると、二千句程を抜いてある無折子の稿本を借り、その中から栗山、千枝、二山、紫明諸子の手を借りてまとめたものと。

勝守

山川花恋坊編

★本句集は紀元二千六百年奉祝きやり吟社二十周年記念事業の一つとして刊行された勇魚遺作句集である。巻頭に村田尚魚氏の序がある。

★内容は「細格子」―可喜津時代大正十三年十一月より昭和十二年七月までの杜若時代。「勝守」―勇魚時代。  
★昭和十六年三月十五日発行。B6版一六七頁。非売品。発行者東京市豊島区高田本町二ノ一四六七川柳きやり吟社。

★不思議なことに、この遺作集には故人の雅号以外、八十島松太郎の名も略歴も誌されていない。鯨鬚工芸という珍しい職業の人、生き残りの江戸ッ子できやり吟社の大番頭だった。

川柳人の一代

石井白面人編

★巻頭に藤生路郎氏の序がある。

★本句集は松坂屋百貨店の七階で松坂倶楽部総合展が催された際の川柳講座の催し物から蒐集

★昭和十四年六月二十五日発行。B6版一。価十銭。発行所堺市出島町三五一番地不朽洞。

★編者は当時の松坂倶楽部川柳部会員。

柳志寸言

本多柳志



◇ペーターペンやパツパハに何の感動も起きないのは、馬の耳だからである。万葉を読んでも白秋を読んでも何の感興も起きないのは、猫の目だからである。作家は猫の目であってはならない。馬の耳であつてもならない。

×  
◇大金をもつ資格のない人が、大金をもつ事よりも、大金をもつ資格をもつ事の方が先だ。

×  
◇人間は死ぬからこそ尊いのである。花は散るからこそ目出度いのである。死なない人間散らぬ花、思つた丈でもいやらしい。

×  
◇悪書逐放が叫ばれている。悪書とか良書とか誰が見別けるのだ。本当の悪書があつたら、読んで見たい。本当の良書があつたら、お目にかかりたい。

×  
◇何があつても驚かないのは馬鹿か、狂人であろう。驚きのないところからは詩は生れる筈がない。馬鹿や狂人には川柳は作れない。

詠近舟同

大阪市 橋本 緑雨

長崎で商談のあとキリストを話し

和歌山市 秋月 宏方

九州一周の旅をして

高崎山にて

誰やらに似ている顔の猿もおり

日南海岸にて

陽はうらら待てば土人も出て来そう

雲仙にて

ここに来て知る湯けむりということば

今治市 長野 文庫

警察の名も書き添えてごみ捨てな

金詰り罪を政治に持ってゆき

進学に使う実印気持よく

ライバルの口からもれた暴露記事

今治市 月原 宵明

動物として地下鉄へ押込まれ

高校の話題さらえた華子さん

台湾は陽の目のみない本家に似

借地権泣いて頼んだ日を忘れ

豆炭に似て情熱は消えかかり

須坂市 高峰 柳児

赤電話だんだん恋が実つて来

初夏へ試歩は厚着をさせられる

免許だけとりカーブの端にいる

再婚をすすめてくれる子に慌て

進学の子に貧しさを鞭うたれ

山口県 吉川 亜人

がみくくと云うて云われて五十年

任職と話のうまが合うて来る



麻生護乃女史（阿部佐保嬢氏撮影）

# 妻を語る (三)

麻生路郎

高島易断の曆を覗くと、八白の女と四緑の男では相性がよくないそうだ。悪妻だとも書いてある。

護乃が長流の水で、私は霹靂の火だそう。長流の水はスローモーションで、悠々と流れて末は大海にそそぐ。霹靂の火は雷鳴の時のあの峻烈な光りを放つ火である。

本来火は水に消されるが、霹靂の火は水には消されない。私はその昔、霹靂火という別号を用いていることを思うと、そういうことに興味をもっていたらしいが、それがために結婚を左行されるほど易に頼っていたわけではない。

結婚後の護乃の句に、  
夕立は小気味よし君が叱咤も  
というのがあるが、私の性格の霹靂の火

を二時的に激げしい夕立に比しているものはおえましい。ここが長流の水の悠々たるよさであろう。たとえ悪妻であったとしても私たちの分身を九人までも儲け、五十年もの水い歳月を、二人三脚でゴール近くにまでやって来たのであるから、今更異議を申し立てる筋合いのものではあるまい。

結婚はしたが、私は毎日葉餅に親しんでいた。一銭の収入もなかったが、護乃も私もそのことには触れなかった。

護乃は北浜のある商事会社の英文タイピストに就職した。勤めると言うよりも通学気分で行って行ったが、妻を働かすことの嫌いな私は二、三カ月で辞めさせた。

私を愛していた姉が亡くなったので、海外に出る希望を捨て、結婚に踏み切ったの

で、私は大阪に落ちつくことにきめ、就職について真剣に考えた。

新聞広告を見て、中之島のさる倉庫会社の求人に応募した。応募者は二百人余りだった。口答試問にパスした。次にその事業と事業先の宮崎県とを結んだ事業論文を書かされた。その結果を待っているうちに、第一次世界大戦が勃発したので、大阪中央電信局に戦時の外国電報の検閲係が要るそうだから、行って見ないかと、友人から勧められた。

早速、当時朝月新聞社の向いにあった大阪中央電信局へ出かけ、受付配達課長をさがっていた広島庄太郎氏に刺を通じた。簡単な応接室で面接された課長は私の前に二、三枚の外国電報を示して、

「これが解りますか」

と言われた。それは三井物産や内外棉花のような大会社からロンドンやニューヨーク其他世界の各地へ発信する商取引の電報であった。

「エエ、解ります」と答えると、

「では、明日からでも来てもらいましょう。で、保証人は？」

と、訊かれた。私は咄嗟に、

「あなたに、成っていただけませんか」と言った。

「エエ、よろしい」

と、意外にも、早速の承諾である。はじめに面会した人であり、しかも雇う側の人に、保証人を頼むなんて、常識では解し得られぬことである。頼む方も頼む方だが、頼まれて、即決に承諾する方も変わっている。

広島氏は後年、電報局のトップである東京中央電信局長に昇進されたが其後亡くなられたと聞いた。第一次世界大戦が終局を告げた時、私は大阪逓信局の囑託を解かれた。そして戦時に従軍したことになるので、論功行賞が行われた際、広島氏は次のようなことを言われた。

「君は勲章をあげても欣こばないと思うから、金をあげることにした」

そして、番号の上部に勲の字のある郵貯の通帳をもらった。広島庄太郎氏のアタマのよさはこんなところにもあった。貯金をしない私もこの特別な郵貯の手前、僅かな金を出したり入れたりしていたが、今から何年か前だったか、郵便局の窓口へ出したら、

「この勲の字の通帳は廃止になっています」と言われ、何の通知も呉れないで政府の一方的な廃止には呆れたが、廃止のために、穴をあけられたこの通帳は記念のためにも私の手許に保存してある。秘密漏洩をしないために、就職の第一歩に逓信大臣に宣誓された仕事の記念品の一つでもあるからだ。（この当時の思い出を書けばきりがないし、妻を語る時は関係がないので省ぶことにした。）

話の前に戻るが、中央電信局から帰宅したら、倉庫会社から、貴下の論文が一席に当選したので、早速出社されたいという採用通知が届いていた。

私は翌朝、倉庫会社へ断りに行った。「折角ご採用下さいましたことは光栄ですが、友人の世話で、大阪中央電信局に勤務することを約して帰宅した後へ、御社の採用

通知をいただきましたので、私の採用を取  
消し、二席に当選された方をご採用下さる  
ようと言ったが、早速出社したのだと解し  
て、大よこびで応待され、ことわるのに骨  
の折れたことを記憶している。いささか自  
慢話のように聞えて恐縮だが、新妻を迎え  
て職が無かったのだから、この就職で  
西区の豊橋の二階住いから早速、北区新川  
崎町の御料地内へ居を移したのであった。

○ 腹乃は無口で、必要以上のことは言わな  
かった。声を出して笑うようなことはしな  
かった。喜怒哀楽色にあらわさず式のお嬢  
さんだったのである。

私の結婚条件の三番目には愛嬌あること  
となっているが、この条件だけは外すして  
結婚したのであった。

私は私の娘等によく言った。結婚の相手  
は大学出であること、スマートであること  
と、家は相当の資産があることなどと、い  
ろいろと条件を持ち出すのもいいが、先方  
が同じように数多くの条件を持ち出して来  
たらお前の方がパスしないことは明明白白  
だろう。結婚条件は必ず割引することだ。  
で、なければ、いつまで待っても結婚なん  
て出来るもんじゃ無いと。

それで私自身も第三の条件を外すして結  
婚したのであった。

新婚当時、  
夕食が済むと川柳三句出来  
と、いう菜屋落ちの句で、ぞめかれたもの  
だった。腹乃も、腹乃の父蘆村も私も川柳  
家であったからだ。この句は誰れが作った  
のか知らないが、多分菜屋落ちの句の巧い

五葉の作ではないかと思う。斯くして幸福  
な日日が過ぎて行き新婚のよろこびを満喫  
していたことは世の嘗の新婚夫婦と同じだ  
ったと言えよう。

その頃の腹乃の句に、  
繫ぐ手の羞しいほど月が冴え

と言うのがあるが、おそらく実感を詠んだ  
のであろう。押売りに凄こまれて、変な売  
菓を高値に売りつけられたのも、夫の健康  
を祈る純情のあらわれだと思えばバカだな  
アと一喝するわけにもいかなかった。

私にしても、見も知らぬロンドンッ子で  
椅子一つない家庭へ連れて来て、まごつか  
させ、コタツの上に座布団をのせて、ユー  
メイシットダウンとやったりしたものだ。

そして、この世界漫遊者に、  
孝行がしたい時分に親はなし

という古川柳を教えたりしてよろこんだも  
のだ。これで見ても私の川柳熱は相当なも  
のであった。後年、ソ連の世界的詩人イリ  
ヤ・エレンブルグに、私の川柳を説いて、  
詩人の小野十三郎を驚かした素質が、この  
頃から孕んでいたのだと思うと苦笑を禁じ  
得ない。

腹乃は主婦の座にあっても、世間的な奥  
様ぶりは発揮しないで、いつまでも女学生  
型で、米訪者があっても、ただお辞儀する  
だけである。

絶えずやって来た柳友の川上日車にもア  
タマを下げるだけなので、私が、  
「何んとか言ったらどうだい」と言うのと、  
「言ってます」と言うのが、声は少しも口か  
ら外へ出ない。それほど無口だった。それ  
でいて、短文も書くし、短歌、俳句、川

柳、情歌と何んでもござれて曾て婦女世界  
の婦人記者時代には戯曲を書いて食満南北  
に教えをうけたりしていた。演壇なら喋べ  
るが対人的には黙りこくっているの、世  
間からはおとなしい奥さんですねえと言わ  
れている。奥さんに言えば、自然に私に伝  
わるものだと考えている人には失望させる  
ことが多い。私の近くに放送局という紳名  
で通っている奥さんがあったが腹乃が黙っ  
て聞いているので歓迎されていると思うの  
か、毎日のように近所のニュースを放送し  
て来たが、腹乃は片方の耳から這入るニュ  
ースをそのまま耳底にとどめ決して再放送  
はしない。手を束ねて聞いていては時間が  
勿体ないので、奥さんが放送される時には  
必ず穴のあいた足袋を持って来て、その穴  
をかかかことにしていると言っていた。ち  
ャッかりしたものである。

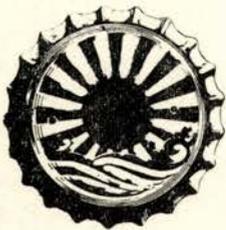
腹乃が無口なために、私が被害者になる  
場合もあるので、少しぐらいは喋べらして  
やろうと思つて、玉出にいた頃ティール  
ムを六年間やった。ところが、はじめは「い  
らっしゃいませ」しか言わなかったが、高校  
の学生などが、お茶を飲み  
に来て、「おばちゃん、ここ  
のところ、どない歌すねん」  
とか何んとか問われると、  
英訳をしてやったりしてい  
るうちに、少しは馴染客  
にも受け答をするようにな  
ったので、それ以上をのぞ  
むのはムリだと思ひ喫茶店  
をやめたら又元の黙阿弥で  
何んにも言わなくなった。

しかし腹乃の無口は私に  
とって困まる場合もある

が、ムシロありがたい場合の方が多い。私  
が何をしようが一切干渉しないのであ  
る。徹夜で原稿と取っ組んでいる時に、  
「あなたお茶をいれました」とか、近所の  
ニュースを聞かされたたり、もう遅いからお  
休みなさいとか何んとか言われたのでは、  
気分が殺がれて折角の原稿が滅茶苦茶にさ  
れてしまうが、その段、飯の時間が来て  
も、飯を運ばないので私の創作的な仕事に  
は世にもありがたい良妻なのである。

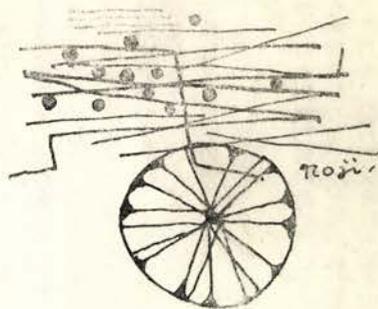
そんな時には彼の女はハワイの柳友古川  
麗花麗が贈つて呉れたアメリカのヘルスト  
という雑誌を読んだり、ドラマの脚本を耽読  
して、私の筆を擱くのを待っているか、机  
にもたれて眠っているかである。何んとき  
でも眠られるし、何んときでも眼を覚ます  
芸当を持っているので、夜更しもやるし、  
早起きもする。疲れたら三日でも四日も  
眠むる。それが彼の女の健康法でもある  
という、まるで猫のような生活を平気でや  
つてのける手際は一寸真似が出来ない。こ  
の習性は九人の子どもたちを育てて来た彼  
の女の特技であろう。(続く)

新発売 65円



アサヒ  
スタイナー

ビールのワールドタイプ



# 私の好きな愛 慾の一句

句は古句でも現代句でもご願意に選んでいただきまゝ家譜氏の  
ご感想を煩わしたところ、それぞれにその人のカラーを出され  
た回答を頂いた。味感されたい。到音順。

(編集局)

(上)

## 妻の髪今日一日の厨の香

○ 東京都 高須 啞三味

御指定の「愛慾」という意が、よく理解できませ  
んが、いわゆる男女間の情感の句と見なして、右の  
抽句を挙げます。——抽句を挙げました理由は、古  
句には愛慾句は非常に多いのですが、末摘花につぎ  
ますし、そうでなければ、遊里句にすぎません。し  
かし、現代句で愛慾句となれば、作者に対する顧慮  
も必要になりますので、いっそ自己暴露の意味で、  
自分の旧作を取り上げました。

句の意味は「妻抱けばあわれや葱のにおいする」  
(最初の句) から、だんだん煮詰めましたもので、  
男が「妻の髪の香」をかぐということが、どうい  
う場合か、御想像に任せるといたしまして、「今日一  
日」彼女がどういふものを煮炊きしたか、その「厨

の香」を夫は妻の髪から知って、悲しくなるのであ  
ります。

## あふた日を覚て居るが女の氣

○ 東京都 富士野鞍馬

明和元年(一七六四)の川柳万句評合にあり、柳  
多留二編に採録されている。  
むずかしい言葉をつかわず、情熱の様相を美し  
く、いつわらず表現されている。恋愛中の女の氣  
は、逢うた日を忘れない。これは現代でもその通り  
である。

○ 東京都 山村 祐

好きな愛慾句と聞かれて、すぐ頭に浮ぶものは思  
い当りません。詩や歌には昔から、愛唱する作品が  
いくつか思い出せます。例えば新古今集から、或い  
は明治期の詩人の作品から。それなのに川柳や俳句

## 明治・大正柳誌巡礼



奥津 啓一郎

又休刊！常習的になったの  
で、一寸何と申訳してよいか  
わからない。(中略)形式は  
月刊でも事案一月号は二月に  
出た始末彼是してゐるうち  
に、もう三月号の発行定日  
だ。とうとう二月号はぬきと  
いうことになる云々

と。  
六月三十日、川柳はま、第二  
号、四六判共表紙十頁、横浜市相  
生町二丁目三十三番地新會祐待方  
川柳浜の会発行、編集発行人横濱  
市神奈川町二九番地田中安輔、一  
部拾銭。

田 中美 水

甘酒屋四五杯売ると灰をかき

新 會祐 待

給細工無駄にならない無駄を  
出し

美水は

現代文壇の苦悶は現実と理想  
の矛盾なのだ、トルストイは  
理想に到達して仕舞へばそれ  
が現実なので理想は其先に何  
時の間にか出来て居ると言っ  
てゐる。

古川柳は理想のように伸びて  
行くものでも動いてゐるも  
のでもない其の古川柳すらに

追着かぬ現代の川柳が文壇に  
認められないのも無理のない  
話だ。

後記で五晩は  
無駄足を隣へこぼす集金屋  
大納言  
五 晩  
恩給が近くすべてを恥とせず  
刀子  
各題天位の句は  
死ぬ様な声で姑風邪を引き

には、愛憎Vすると言えらるほどの作品が私にはないのは不思議です。詩や歌のように、感情の流れVをこめるに足る長さが必要なのでしょうか。十七音の形式は愛憎の表現には不得手なのでしょうか。まだその辺のことはよく考えておりません。

帯止めの落ちた音から解きはじめ

(不詳)

二十何年前、宇和川木耳さんから何気なく耳にした句ですが妙に忘れられません。若い僕には「その後にくる者」にかたずをのんだことであります。未摘花のなかにもまことに官能的(理性的に)なものがありますが、とにかく愛欲の哀歎はそのあとさきのムードにつきる気がいたします。でははじめに

慰めてやれば女は窓へ佇ち  
○ 神戸市 三条 東洋樹

素晴しき火刑君と曼珠沙華の中に

(赤田佳与子)

飽くなき愛欲の果ては、サドイストとなりマゾイストの傾向となるのは、物の本にも書かれている通りだが、未だ川柳でそこまで突き込んだ作品を発表する人は少ない。まして女性の身では、恋愛のきれいいごとを句にしても、この作品のような異常な嗜虐の愉しみを川柳にしたのは珍しい。しかも愛欲に偏重せず、真紅に咲いた曼珠沙華に詩想を托した点、全く素晴らしい想像力だと思ふ。

○ 西宮市 相元 紋太

抱いた子にたたかせて見るほれた人

(柳多留 初篇)

愛欲の真つ只中の句ではないが、花のつぼみの今や開こうとする、或は、触れば落ちん風情の、という私の好むタイプの未婚の女性。二十才時代の私が、柳多留を読んで、ぞーっと惚れこんだ句、あんまりどぎついにより、こんなのが好き。

子を抱けば男にもが言い易し

(初篇)

の理で押してくるのよりずっとよらしい。古句の多くが、言葉つかいが田満で、とんとんと調子がよいのには感心します。

○ 東京都 山路 閑古

そこかいてとハイやらしい夫婦中

(柳多留初・25)

この句は未摘花初・3にも採録されているから、愛欲句であること疑いない。前句は、むつまじい事くで附合いとしては大して見所もない。問題は何処を搔くのかということ、或人の説に何処を搔くでもない。ソコを搔くのだと。次に問題になるのは場所、二説ある。店と床の中。店先きで人の見るところであるから「いやらしい」が成立すると。これが前説の根拠。店先で夫婦はそんなことをしない、

よって必ず床の中でなければならぬ、これが後説。要するに結論を下し得ない句であるが、僕ひそかに思うに、これは床の中で、夫が妻の背中に手を入れた時のこと、妻は必ずそこを搔いてという。これは紋切型のものである。「いやらしい」は前句の陸じいと同じ意味、よって附合いとしては成功していない、「上を下へ」と「ならばよいが」。

大正十四年(一九二五)  
一月一日、桂馬、創刊号、菊判三十六頁、川柳新屋会発行、編集発行人東京市小石川区大塚坂下町九十六番地早川貞次郎、随時刊、非売品。

早川 右近

小癩にも犬の子昨日今日を吠え  
早川右近(直接なこと) 太郎丸  
(句の生みの親から(-)) 不倒人  
(十一月の句会) 秋季大会詠草等  
が載っている。

会員伊藤雨月、伊藤青秋、伊藤宵雨、早川右近、田中不倒人、田中金一郎、古谷盛光、三浦太郎丸、島田娘々奴、会友川上三太郎という顔ぶれ。

一月一日、ホコスギ、七、四六半截共表紙十二頁、川越市堅久保町清水美江方川柳鉢杉社発行、編集発行人谷白雨郎、非売品。

谷 白雨郎

掌でうす皮を搔む落花生

清水 美江

ひいらぎの葉に冬の陽をふと見付け

同人谷白雨郎、小林一考、長谷川秀丸、清水美江。大正十三年一月一日創刊。

三月五日、川柳創作第三巻第二号四六判横綴八頁、金沢市新道町三番地ノ一、末広川柳社発行、編集発行人金沢市白銀町四十六番地ノ一、埴田詮治。

佃 嶺月

ワンタン屋辻から辻へ暇なこ

と

高 畠紅花坊

地獄から貰った金の温かさ



ココロ 箋 便



# 雨の嶺安興



東野 大八

さる週刊誌で、秘録屋の中山正男が、八木沼丈夫の人生というタイトルで、この人の追想記をも書いていた。

八木沼丈夫とは、中年以上の人にしかなじみのない完全な戦前派の歌人である。それもよほどの人でないと知らない。

しかし、戦前の日本人なら誰でも一度は口にしたことのある「討匪行」の歌の作者だといえは「ああ、あのうたはこの人の作なのか」と思い当たることになる。この有名な歌には作者名はついていなかった。たしか「関東軍〇〇部作」という風に、軍歌集には載っていたはずである。

へどこまでつづくぬかるみぞ

三日二夜は食もなく

雨降りつづく鉄カブト

このうたは、私が軍隊生活の間中、つねにくり返し、くり返し、うたわせられたうただったであつた。それは、私の軍病院生活の末期には、日課の一つにさえなつていた。軍歌演習を、一日一度は実施させられたためである。私はこのうたを口にするたびに、八木沼さんの「異人さん」のごとき風貌を思いうかべ、時にはその郷愁みたいなもので胸膈かまされる思いをしたことであつた。私

の柳号「東野大八」の名付け親は実にこの人であつたのだから……。

私の本名は「古藤」である。これは養子になってからの姓でそれ以前は「車」であつた。クルマという珍姓は、中野重治の「空想家とシナリオ」のプロローグに登場する、江戸時代の非人頭車善七にあやかる車善六の主人公によって遺憾なしたが、この一件については、以前本誌にも書き、「人間横丁にも収録されているので割愛する。ただ、この車姓によって、私の柳号「大八」がたちまちのうちに製作されたのである。車という字にこの末広がりメダライ字面は欠かせない。大八車の反対である。

とにかく左様な次第で、大八には縁故があるが、上の「東野」に至っては出生地や、私の縁故筋をふくめてもカケラとてかわりはない。完全無欠の架空の姓であるわけだ。然らばどうしてこんなのがまかり出てきたのか、そうせんさくされるとき、もっそりと八木沼丈夫が眼前に現われるのだ。

「キミ、このエライ人を知っているかい、姓は八木沼、名は丈夫だ。君がいま使用している東野なる姓の生みの親は何をかくそうこの人なんだよ」

これが紹介の辞であつた。討匪行の作者であることは、以前この人であることは承知していたが、実物を前にするのははじめてである。昭和九年だった？ と記憶する。鼻梁高く、眼窩（カ）はふかく、引き結んだ唇は知力の象徴のようであつた。長身の長い四肢をつかねて、時折りめい想するかの

酒 清



灘・魚崎

金露酒造株式会社醸

如きポーズをとるが、言葉はすべて詩的折揚にみちて、音吐ロウロウたるコーセキのよさは無類だった。

「この社長が、君のペンネームを考えてくれといわれてね、私はす

ぐひんがしの野をこの双ぼうに描いた。ひんがしは内蒙古の草原であつて日本のそれではない。オロン湖畔の草青く、馬は肥えたりあ祖国、この蒙古青年の歌は私の作なのだが、ジンギスカンの壯図の夢状に、オロン湖畔はひんがしの末っかたの国土であつたのだよ、私は東野の姓を想うとたちどころに、名は潤しようと思つた。この潤たるものを見給え、なんとこの豊厚な字画が、玉が朱門の中にひそみ滴る水がある。この诗情の深きビジョン、東野潤はかくして生まれ、君に贈られたのだ。若い野性味溢れた君にこそこの名はふさわしい」

若い私は、悟空が馬の下から三蔵法師を仰ぎみるように、八木沼さんの姿を前に胸高鳴らせてこの声にきき入っていたことだつた。時に私は芳紀二十三歳だ。私はかくして生涯東野を抱きつづけて死ぬことを決意した。（純情多感だったのですなあ）

しかし、城島先生は「潤」をあっさりケズって「大八」と改めた。そこで私は八木沼先生に「正裁可」を仰ぐことになったが、八木沼さんはおそろおそろこの由を言上する私の顔をしみじみと眺めてのち、ニタリと不敵な笑みをうかべていったことだつた。

「ウム、大八という名は君にピッタリだ。まるで八達嶺の若者のようだ。よからう潤はすてて大八にし給え」

人生とは面白い、持って生まれたい姓があと形もなく消え失せ、架空の呼称がつくかと思えば、一転して途方もない奴が別口から現われ、日本政府へ登録するような破目となる。

東京はじめ大阪や四国に散在する私の大陸派の友人はいまもって「東野君」と呼び、「おい東野」とアゴをしゃくる。時折これを口にされると生地の傷んだ私の琴線はビクリと大きな反応を示すのだ。

石原青竜刀さんはこの八木沼さんと友人だったのだが、この人も今もって私のことを「東野」か「大八」としか呼ばない。どうやら本姓にはあまりご関心がないようだ。番傘の宇和川木耳さんだって同様で、石原式に「東野君」「大八君」といまでもってコレ一本やいだ。

さて帰国後、八木沼さんは一体どうしていられることか、と時折思いうかべたことだが、中山正男の一文には、昭和十九年十二月十二日北京の仮寓で、心臓病のため死去したとある。この日、このとき、私は北京陸軍病院の骨傷五病

棟に片腕を失って栄養失調でしんざん中であつたのだ。中山正男もこの一文の最後につきぎのように結んでいた。

村人ら幾山こえてのがれらむ犬もぞ瘦せておびえつつ吠ゆ大根の花咲く畠にくきならもいたくぞ伸びて人かえり来ぬ百草の雨のうるおうごとくにも人和らむとときとくこよ

「逃匪行」のなかの「敵にはあれど屍（なきがら）に、花をたむけて、ねんごろに」であつた。

このあとにつづくのが「興安嶺よ、いざさらば」なのだが、この人は興安嶺が好きだった。空には雨のあるものぞ降り降り降りて降りやまず  
という作品にもあるごとく、興安嶺のこの雨がやがて「討匪行」につづいていったのであろう。

# 金 泥 集

## 麻 生 菫 乃 選

### 「婚 約」

弟にたかられている婚約者	阿 茶	婚約中レディーファースト忘れぬ	清 子	婚約者あるとも知らずプロポーズ
婚約はしたが一年外地詰め	同	スターの婚約週間誌鏡い合い	同	婚約に誰はばかろう御堂筋
婚約の発表会へマイク来る	同	婚約中三面鏡は開けたまま	同	古傷がまだ婚約へふみきれず
おとんほの婚約肩の荷をおろし	同	デートをば知らない母の婚約期	徳 子	ポケットに不信をためて婚約す
婚約の父へ息子が首をふり	同	婚約はつとめをやめてほどこきもの	同	今一步婚約までに漕ぎつけず
婚約へ思わぬ横槍過去が知れ	同	婚約時代もつとハンサムだった筈	同	婚約のスキー列車でたのしそ
平然と婚約旅行から帰る	操 子	婚約の頃がなつかしバルコニー	同	彼彼とふたこと目には婚約者
母さんのどこか淋しい祝膳	同	二人だけの婚約春はまだ遠し	醉 夢	慶びを素直にいえる若さなり
婚約の新憲法へ親の愚痴	同	婚約の昔裏切り予測せず	同	婚約のここでも甘い色を選び
子供同志なじませて見て婚約し	同	婚約解消さらりと口笛吹く乙女	同	倒産と共に婚約つぶれたり
婚約発表こんどは記者を煙に巻き	きさ子	婚約へ袂張り替え畳かえ	一 栄	婚約を仏壇へ母報告し
水すぎる春とマスコミまた騒ぎ	同	伴せは婚約指輪のかがやく日	同	待ちかねた婚約の日に母は泣き
婚約のまんま二年を病みつづけ	同	婚約後のデイトは夫婦気取にて	同	しゃあ／＼と末の娘が娘約し
婚約成立デイトも実用的にする	同	婚約に逢うてはならぬ人に逢い	花 梢	次回題「ハンドバッグ」切五月末日

川 雜 備 前 支 部 創 立 十 五 周 年  
並 濱 田 久 米 雄 婦 郷 記 念

## 川 柳 大 会

時 5 月 24 日 後 1 時  
 日 永 町 公 會 堂 前  
 所 追 憶 浜 田 久 米 雄 婦 郷  
 兼 相 手 心 直 富 水 岡 松

席 題 三 各 題 共 三 句 以 内  
 會 費 150 円 記 念 川 柳 手 拭 寫 真 代 共  
 投 句 50 円 切 手 代 用 同 封  
 懇 親 宴 350 円  
 投 句 及 連 絡 先 岡 山 県 和 氣  
 郡 吉 永 町 福 滿 856 永 松 東 岸 宛

## 柳誌のあり方批判 (月評)

□ ■ □

長野 笛 朗



—  
やあ、お上りなさい。狭いところだが、遠慮をせずに炬燵へ足を突っ込んでもらおう。

一足飛びに春が来たからと思ったら、この二、三日は雨と冷たさで、老人にはこたえるよ。

何? 匿名批評をしてくれってかい。そうそう、春三氏が路郎先生を御助けして、編集の御手伝いをする事になったとかで、春三氏がこの間訪ねて来て、ゼヒ僕にやってくれといわれたんだが、御承知のように、隠居の身分でもあり、近頃の川柳界の事情も詳しくは知らぬので一応はお断りしたんだが、君まで出て来たんじゃ、しよがない。

この小言幸兵衛何を言い出すかわからぬが、まあ間違った事はいわぬつもりだよ。

そうだねえ。匿名は長野笛朗とでもしてもよろうか。ロングフェローが「批判家は煙突掃除夫だ」と皮肉ったそうだがそれをもじってロングが「長い」フェローを「笛朗」とな。随分悪い洒落のようだが、こゝろで勘弁してもらふことにしよう。

匿名だからといって、八っ当りや、我田引水の毒舌はやらぬつもりだし、公平厳正によいことはよ

い悪いことは悪いとハッキリ割り切って行こう。

—  
それでは、あまり手許に資料がないので、目についた雑誌からでもとりかかるとして、こゝろでお茶でも飲んでもらおうかねえ。

二

先ず「番傘」四月号からとりかかるとしよう。何しろ九十六ページという大冊で、一寸した俳句雑誌にも劣らぬ堂々さ、表紙も水府の題字と毎月美しい画で飾られて、レイアウトも編集も整然たるものはある。俳句でいうならホトトギスの貫祿であろうか。

ところが、さて蓋をあけて見ると驚いたことには、文章というものが殆どなくて、同人と一般投句家の川柳作品だけが一杯のせられているんだ。大世帯となるとこんなことになるといえはそれまでだが、天下の番傘であると豪語し、本格川柳の本家だと誇称するならばだよ、少くとも会長である岸本水府が、巻頭に毎号、いうところの本格川柳についての解明と、指導方針ぐらいは書いて然るべきではないかと思はる。

まあ試みに同人近詠を初めからコッコツと読んで御覧なさい。よくもまあこれだけ、似たり寄ったりの句が際限もなく列んでいるも

ので仲には秀れた作家もいるのだろうが、全く食傷してしまつて最後まで作品を鑑賞する気になれぬというのが正直な感想だよ。それにあきもせず、毎号自分の句が五句抜けたか、三句抜けたかと鶴の目鷹の目でページのあちらこちらを探しまわる作者を考えると滑稽でさえある。

何といつてもこの雑誌に要求したいのはたとえ、このページの幾割かでもエッセイに割くべきで「革新ぎらいの番傘が、堂々と筆陣を張っていわゆる「本格川柳」なるものの本体を堂々と主張し、彼等のいう「革新派の作品は本當の川柳でない」と蔭でつぶやくのをやめて、エッセイの上で対決をはかるべきではなからうか。古川柳の伝統の受け継ぎ方、三要素に対する考え方、リズムと形式の問題について、水府をはじめ数多くの作家が、真剣にエッセイの上に於て世間を納得させてくれなければ、凡そ雑誌を公刊する意義はななく、いたずらに同人や投句家の数の多いことを誇つても、それは嘗て、桑原武夫が俳壇に爆弾を落したように、仲間同志の慰戯にすぎないもので、番傘が考える川柳の主張が分りはしない。

—  
徒弟の住み込み奉公的結社観念は俳句のホトトギスと通じるもの

—  
があって、やがては時代から取り残される日が来るかも知れんぞ。

—  
御大の巻頭句を見て思うのだが、水府は才人でもあり、軽味の抒情句に昔はすぐれたものがあつたが、近ごろの作品も全く浅いくすぐりや思い付きに過ぎなさすぎるようだ。

—  
十二時間寝たと日記に書いてあきれ

—  
水府  
もらい物ですと包装苦勞せず

—  
同  
佛像を見すぎゴツチャになりまして

—  
同  
どうひいき目に見ても、これが現代に生きている作家の句とは思えない。

—  
同人近詠一々鑑賞していたら何ページかかるか分らぬし、それはど僕に辛抱強さもないので、手あたり次第に拾つて見ると

—  
安井久子  
だまつてる関志煮つめていろらしい

—  
同  
群衆のなかの孤独がおもしろし

—  
同  
神と悪魔を討論させた日の頭

—  
同  
愛に冷たき額射ち抜くかも知れず

—  
森井惠美子  
原子の火しよせん女は飯をたく

—  
同  
人待てば女の耳の犬に似る

—  
石川ことゑ

終電に目つむる暮らしつつくなく、気がついたら女性の作品ばかり

上げたことになるが、筆者は何もフェミニストではない。

この三人はしっかりした個性と内部に何か持っていてそうで楽しめ

## 三

次は「ふあうすと」へ移ろうか。君も、頂きもののお菓子で悪いが、つまんで下さい。筆記してくれるのも大変だろうが辛抱してくれ給え。

「ふあうすと」の御大、紋太も近年めっきり弱って病床の人らしいし、竹二という好作家を失って、他人目には一寸淋しくなったねえ。

ここは新旧合同といつてよくいろんな流派が集っているようだが、シャッポに紋太さんを被っている間はいがねエ。万一の事があると、大部傾向の違う人の寄合世帯だし、幹事に天狗も多いようだから分裂さわぎも起りかねないよ。

まあそんな他人の仙気はやむ必要もない。肝心の四月号を見よう。

老いたりといえ、病床にあるとはいえ、紋太の川柳に対する執念

の強さは、毎号の数多い作品と代筆までさせての文章にも表わられている。

紋太作品は例のように淡々白々、「川柳は人間である」と解ったような解らぬようなことをいう人だが、何んといつても善人で、平凡で温和な老人だ。この人の句を垂鈍のようにいためつけるだけの衝気は僕にはない。文章はいつもきまって、今の川柳が明和の古川柳でなくて、明治に起ったものであること、「川柳」という名称がいつから起ったかということ、性こりもなく書いてある。これは「茶の間」以来の彼の頭をしめる問題らしい。

「ふあうすと」は番傘よりも文章が載ることは載るが、企画的なものは全然ない。漫然と書かせたものを載せるという方針で、一本の筋が通っていないところ、中途半端な性格をいろんな面で見せつけられる。

編集やレイアウトは田舎くさいが、それでも最近では、カットや見出しの活字の使い方は新しくなつた。

この雑誌の興味は「川柳山脈」であろう。四、五人の匿名批評の幕の内弁当だが、かなり辛辣に

いた事を言っているのはよろしい。たった二頁だが、多角的に問

題点をとらえて、無遠慮にやっているのは結構なことだねエ。

光武弦太郎が「剣花坊ノート」を連載しているのは好読物で、前の五呂八研究といい、弦太郎の努力を買いたい。唯彼の筆は冗漫で引用が多すぎて、全体としての五呂八や剣花坊の実体をつかむのに骨が折れる。いわばこれは五呂八や剣花坊の研究の資料の提供のようなもので、光武自身がそれらの資料を十分咀嚼しての上で、自分の目と頭で剣花坊五呂八像を描いて、圧縮したものにした方がよくはないか。とも角この真剣な努力だけは買っておこう。

湯川銀界が今更らしく倉地与年子の社会性や抒情性にふれているが、真面目でよろしい。唯視野が狭く、自覚がおそく、短歌界では十年も前から岡井隆、寺山修司、塚本邦雄、田谷銳其他の精鋭がこれらの試練の業續を命かけてやっているの、俳句や短歌の世界では、硬質の抒情の変革や社会性が花々しく展開されており、銀界が今更らしく取り上げるのは遅きに失するが、まあこの人などはふあうすとに将来に何かの役割を果せる人としてはめておこう。

作品欄の顔ぶれの中では、太田千鶴恵、時実新子、泉淳夫、平田のぼる、葵徳三、土井一三三、泉

比呂史、鈴木九葉等々新風をもった作家が居り番傘の雰囲気とはちょっと違うようだねえ。

竹二なき後は九葉あたりがその空間を占めるのではなからうか。泉淳夫は秀作家だが、こんどの八巷談本牧亭Vなどこの人の持ち前のものでなからうと思うがどうだろうか。

次は「平安」四月号を散歩して見よう。

この雑誌も同人が旧番傘系、京系、川柳春秋系——それに全然傾向が違う旧川柳ビルの系、寄合世帯で創立当時はハラハラさせたが、やっと纏まりもつて立派な雑誌になった。

この雑誌は編集人がしっかりしていて企画がある。毎号何かの問題を提出して社内外の評論家に書かせているが、執筆依頼先も、右から左までこだわらずに入取れて行く態度は立派である。

最近では難解派といわれる上田粒なども同人に迎えており、堀豊次が「新選苑」欄を受持つて始めに考えられたように旧川柳ビルの作家がいつか消えてしまうのではないかと杞憂もふっ飛んで、それらの影響で平安同人及投句家が新しい方向へ進んでいる事は結構なことと思うよ。今月の企画は「主観句と客観句の再検討」につ

いて諸家に語らしめているが、山本浄平は設問に対してはやや的外れ、北川絢一朗が、主観句をこれからの川柳の行き方として認めているのはおもしろい。湯川銀界は、一番研究的な態度で具体的に三つの作品集を例証しながら論じているのは好感ももてる。

それは銀界が「客論句」とは何かという概念設定について真面目に検討し、一応客観句を伝統系の作品に見られる客観的な語出から考察を始めていることは妥当であると僕は思ふねえ。尤も彼が竹二の句集から純客観句と挙げた二句中の放浪の目の前袋流れだす

は純客観の例証としては適切でない。一見客観句のように見えるが「放浪の目の前」に焦点を置据えて欲しい。俳誌「天狼」などというところの根元的なものがあつて、主観がきびしく内在していると思ふんだよ。

何にしても平安は率直に言つて編集陣の企画と意欲と、保守革新両面の川柳作家に呼びかけようとしている態度は立派である。

また外に「川柳岡山」「川柳人」「しなの」「柳都」などにも触れたかったが割愛しよう。少し老人疲れたからねえ。また来月御越し下さい。何の御愛想もなくってこんなもので他愛のない月評に就いたが、追々本腰を入れて厳正批判をやろう。路郎先生によりしく

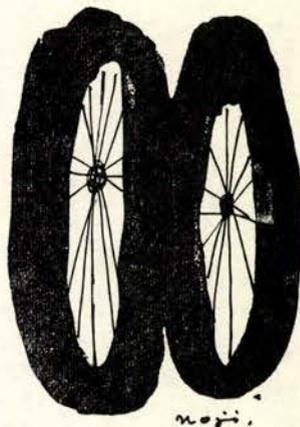
# 集路一

者 采休人  
半若 尾 弘田  
選 西国森

## 深入り

西尾 菜選

深入りが親子の縁を切つて添い 伊久野  
 深入りを責める父にもあった過去 正一  
 深入りを捨て鉢にさす中年期 桂仙  
 証券屋深入りさせてそっぽむき 千夏  
 深入りをしたベトコンに手が抜けず 天目  
 女遊び教へ深入りすなと叔父 孝正  
 深入りもせぬ中庸の堅実さ 啓  
 親切に見せて深入りしともない 木魚  
 深入りがたり自腹を切らされる 孝風  
 夫婦喧嘩に深入りをして借られる 光道  
 へそくりがきれて深入りせずに済み 可住  
 ライバルの意識が深入りさせをまひ 同  
 噂通り深入りしてるやつれよう 花美  
 何事も深入りしないエゴイスト 十九平  
 曲つたことがきらいで深入りしてしま 静水



深入りをせぬ気で付合いたければと 鶴丸  
 深入りも使い果した頃に醒め 代仕男  
 深入りと知つてとめぬなきぬ仲 万竿  
 深入りが三面記事の種となり 勝子  
 深入りに終止符うった心中沙汰 藤波  
 仲裁の深入り両家の鼻つまみ 野迷路  
 御親切だけでは無いと母注意 八九寸  
 深入りをせぬまま定年無事迎え 保夫  
 深入りが小出しですまぬようになり 千翁  
 五十過ぎ深入りしたのが手におえず 半月  
 忠告をした自分が深入りし すみれ  
 深入りの五十男で耳かさず 愛鳩  
 深入りをすすむ気でなかつた使い込み 静波  
 深入りに気付いたとたん手が廻り たけお  
 深入りの信心氣遣いとも言われ 雄声  
 身の程も知らず深入りして慌て 宗太郎  
 深入りして女の方が怖くなり 淀月  
 深入りもせず足ふみして暮し 久美子  
 深入りをされて迷惑新世帯 良江

深入りとわかるが男としての意地 圭水  
 うますぎた話と落ちてからわかり 宗儀  
 不可抗力などと深入り言えもせず 隆子  
 掛けこら深入り妻も子も泣かし 杏花  
 深入りをせぬので妻も目をつむり 生薑  
 虎穴から虎兇といきこみ深入りし 同  
 深入りを訓せばあなたに判らない 独仙  
 深入りは耳も聞えず目も見えず 古心

### 佳句

深入りはせぬ約束の金を借り 木魚  
 深入りの罪しよばなにちと儲け 可住  
 深入りをしたいきまが腑におちず 十九平  
 深入りと別に六法全書読む 雄々  
 推理好きが深い深入りしてしま むじな  
 人様のことに深入りしなさんな 弘朗  
 深入りを他人面白そう話し 古心  
 軸  
 深入りした戦争を例にひき

## うたた寝

国弘 半休選

うたた寝は五輪音頭をかけたまま 伊久野  
 うたた寝がまだたりないあくびが出 多駄志  
 うたた寝の夢でも愚痴か口動く 光道  
 うたた寝をおどかすよに電話鳴る 秀峰  
 うたた寝に子守り小供を見失ない 可住  
 うたた寝にそつと情けの掛け蒲団 繁太郎

うたた寝へお梶は羽織つとかけ どん安  
 間の抜けたとこでうたた寝返事をし 良江  
 肩の息も心よい程ひざ枕 初甫  
 うたた寝へ酔覚めの水おいてあり 周甫  
 うたた寝の嫁へ姑が氣を使い 孝正  
 入試前ママもうたた寝して居れず 万竿  
 店番のうたた寝客に起される 勝子  
 夜遊びのうたた寝白い眼で見られ 藤波  
 うたた寝が逐一きいていた皮肉 藤波

### ▽応募される方へ△

一路集ランは、与えられた課題をいかに巧みにこなせるかの試練の場所であるから、第一に題を十分に検討して、それから作句にかかることである。そして出来上ったら、出句するまでに、素材の扱い方はこれでよいか。字句はこれでよいか。類句はないかとかいろいろの点から自分で慎重に審査してから、応募していただきたい。

(路)

うたた寝で聞いた秘密のあとときき 野迷路  
 うたた寝の枕に塵布団あてがわれ 光郎  
 うたた寝に帯の結びが邪魔になり 静枝  
 うたた寝をクシャミ一つに起される 凡子  
 うたた寝の夢が覚めたら抱かれてた 啓  
 うたた寝の間に売上げを持ち去られ 天目  
 うたた寝の夢は銀行駆けめぐり 李鳥  
 うたた寝を支えて肘がくたばれる 千翁  
 うたた寝の顔丸出しにしたあなた 千翁

うたた寝がまた宿題にゆすられる 千翁  
 うたた寝をうつかりしてたないしょごと 半月  
 うたた寝へ声を落せば目を開き 和郎  
 向きかえたままでうたた寝またむねり 愛鳩  
 うたた寝していたこととして詫びをし 列志  
 うたた寝も日課の一つ八十路行く 惠二朗  
 うたた寝の陽足は既に部屋になく 桂仙  
 うたた寝に女の立つた意識する 春己  
 うたた寝の眼にかけらうの立つ平和 可住  
 うたた寝の妻をそろうと寝かせとき 静水  
 床をとればうたた寝目をさまし 静水  
 下心あるうたた寝と見抜かれる 弘朗  
 うたた寝へ蠅一匹のしつこ過ぎ 圭水  
 うたた寝の着物の皺は気にならず 旭峯  
 何か喰う音にうたた寝起きて来る むしな  
 うたた寝をされてテレビも 阿呆らしい 木魚  
 飲み足らぬ友がうたた寝起こしに来 代仕男  
 うたた寝へソットしときと母の声 滋雀  
 うたた寝をして古物屋儲けてる 八九寸  
 うたた寝の寝言は文句言い足らぬ 保夫  
 快方に見えて看護婦うたた寝る 花美  
 うたた寝の頭へ枕のくさび打ち 隆子  
 うたた寝の夢の続きを考える 宗義  
 勉強の疲れうたた寝咎めない 独仙  
 うたた寝の夢にコルトが火をふきし 古心

佳句

つき当壁でうたた寝する 度胸 句楽坊  
 うたた寝も居眠りもベテランや 雄声

うたた寝の夫へ着せて縫いあがり 宗太郎  
 うたた寝が好きで甲斐性のない夫 淀月  
 うたた寝の看護づかれが見える母 九呂平  
 うたた寝のこつも知つる年前期 九呂平  
 長鳴が打てばうたた寝目をさまし 雄々  
 叱られて子供うたた寝してしまい 晃男  
 失業をしてうたた寝の快を知り 十九平  
 独身のうたた寝朝まで灯が点り 十九平

軸

お通夜の管がうたた寝してしもた

忘れる

森田茗人選

旧友は忘れた頃にやって来る 初甫  
 春うらら忘れる物が多くなり 辰始  
 招待へ大事な先を忘れて居 代仕男  
 酒呑んで借金忘れる手もおぼえ 静波  
 春風がもてあそんでる干し忘れ 八九寸  
 忘れもの女中だったら鳴る太鼓 多駄志  
 忘られたスターを思い出す訃報 晃男  
 命日を忘れるほどの親不孝 十九平  
 こより何故指に巻いたかを忘れ 可住  
 金貸した事を忘れる 菜天家 鶴丸  
 あれもメモこれもメモして置いて忘れ 独仙  
 もう用がすんで忘れ物思出し 桂仙  
 誕生日手ぶらの帰宅恨まれる 春己  
 忘れ物遺骨までとは恐れ入り 宗義

健忘症笑い合つてる 共白髪 独仙  
 もの忘れたしかに二年を知り 弘朗  
 結婚記念日昨日だったと思出し 良江  
 どこでどう飲んだか財布の銭足らず 光郎  
 車中いま元證忘れたのに気づき 凡子  
 チッポケな貸しを流した年忘れ 同  
 忘れるとあかんと指をくられる 勝子  
 痛手にも忘却という神の知恵 万竿  
 解散になって公約思出し 可住  
 忘れよう過去幸せな今だもの 孝風  
 定年者いつとはなしに忘れられ 李鳥  
 妻の留守こうまでしてる忘れもの 静水  
 学校が近く内の子の忘れもの 同  
 お名前を思い出せないまま別れ 花美  
 本名は忘れあだ名思出し 良江  
 やめたんじやないよ忘れて来た煙草 光郎  
 新聞を買うたが眼鏡忘れとり 周甫  
 値切りたおして釣銭を取り忘れ 惠二朗  
 爪に火を灯した先祖を子が忘れ 藤波  
 わちははの生年月日をまた忘れ 雄々  
 そんな義理忘れてしもうた三代目 惠二朗  
 何もかも忘れ去りたい日の孤独 生薑  
 かえせとも言えず百円忘れられ 愛鳩  
 忘れたといふことだけを思出し 圭水  
 今聞いた番号忘れ 架け違え 滋雀  
 忘れ物届きアリアイ崩れて来 秀峰  
 何も彼も忘れて来いと旅に出し 宗義

佳作

空青く背伸びて過去を忘れ去り 千翁  
 無理をして返しにゆけば忘れて居 宗太郎  
 洗面所顎を忘れて朝の膳 隆史  
 寝めあげた祝辞新婦の名を忘れ 八九寸  
 立ち話どこかで何か焦げくさい 和三郎  
 欠勤の電話に喉を入れ忘れ 旭峯  
 メモをした紙切れ財布ごと忘れ 静水  
 今もまた何か忘れる 市場籠 淀月  
 共白髪んかの種を忘れはて 惠二朗  
 市場籠ハガキ忘れたまま戻り 九呂平

人  
 夫やさし忘れぬ人日々崩る 生薑  
 地  
 かけたこと忘れて錠をかりに起き 光道  
 天  
 国訛り消えて故郷を忘れ出し 新雪

色紙短冊  
 書画用品  
 大坂戎がし  
 丹月堂  
 中野セニセニ



入門講座

研究題「皮」

清水白柳

どうも此頃句が出来なくなつたとか、句を作りたいのだが考えがまとまらない、などということをよく聞かされることがある。同じところを堂堂めぐりしているような感じで、すこしも焦点がきまらないなどという作家には課題が立派に役立ってくれる筈である。課題をじつと見つめて、それに関連のある事柄を丹念にしほってゆけば必ず何かに気付くことになると思う、それを繰り返し繰り返し句に現わしてゆけば、十句に一句、二十句に一句は気に入る句が出来ると思うのである。作句経験の長い人であれば、その繰返しは句は紙に書かなくとも頭の中で出来るはずである。そうしたことに課題吟の持つ意義を感じてゆきたいと願っているのである。

今回の研究題の皮は範囲の広い題なので、色々な皮があった。着想を拡げるといくらでも句が出来るといふ種吟程の中の広い句想をみながら見せて頂いて大変有難いと思つた。果物の皮では味よりも皮で売りに込むみかん化粧の句は風刺にならないか化粧の句は風刺にならないか、作者は味よりも皮でというところに重点を置いたのだが共感を呼ばないのは底が浅いからである。リンゴの句も描写だけなのだが捨て難い味をもっているのはの字を描く膝のあるじを想像させるからであらうと思う。

まつかの皮他人にむかせと嫁の手へ H 消費美徳栄養ある皮厚う剝き 辰 始 瓜の皮は大名にむかせ、梨の皮は乞食にむかせ、という古い諺があるそうだが、他人にむかせといふのに何故嫁の手へ渡したのか判らない。嫁に来た以上は他人ではないのだが、と思うのだがどうだろうか。栄養ある皮の句は大へん苦心されているのが判るといえる。

ビタミンは生でなくちゃと皮を喰へ M 皮ぐるみ噛る若さがうらやまし 和郎 皮むいて喰べよと言うにカジリ付き 周 甫 ビタミンの句はその通りなので説明調になってしまった。皮ぐるみの句は若さがうらやましいといふところに作者の年令があらわれているのがよいと思う。カジリ付きの句にはほほえましさがある。恐らく孫なのであらうか情景がよく出ているようである毛皮の句は同性のねたみ尻目にミンク着る S 国寶の毛皮は軽く肩にのり 初 甫 ミンク着て児のスカートのみじかさよ 寿美詞 ミンク着てまことの愛が慾しという 醉 夢 同性のねたみの句は余りにもありふれた事柄なので着想が浅いと思う。国寶の句は軽く肩にのっていると感じた作者に共感のもてる作品になっている。児のスカートの句にはミンクを着ているママと連れている児のスカートとのアンバランスに作者が興味を感じたのであらう。まことの愛の句は深いものを持つている。題をここま

で掘下げられた作者に敬意を表したいと思う。 わにとかけ女とろかす皮に化け 万 竿 面白い句である。着想もいいし、表現もそれに相応していて成功している。併し気をつけなければならぬことは、作者がこれ以上面白がっていつもこうした句を作ってはいけないということである。 皮らしく似せた鞆が身にうつり S 本皮に見られビニールでれて居る 宗 義 皮製品大事におしとランドセル 松 風 鞆の句は自嘲といったものを感じさせようとしているのだが、それを感じさせるには表現に物足りないうところがあると思う。皮らしく似せたと八字も使っているが皮に以たと五字でもすむ筈であるから考えてほしいと思う。ビニールの句は他にもあったがでていないというところに面白さがあつた。 ランドセルの句も同想があつたが素直な表現がよかつたのであるといえる。 あの人の紐らしいね皮ジャンパー 寿美詞 無雑作に札束が出た皮ジャンパー どうも皮ジャンパー族は川柳家から見るとやくざ風に見られるらしい。わたしの仲間も皮ジャンパーで車にのって走っているのだが、 身体保護によいのだといつていぞ脱がない。 皮バンド太った腹で下りき M 帯皮の穴に悩めをさとられ 和 三郎 太った腹で下りきみと何もかも言い切つてしまつては、そうだなと合程を打つただけでも感じさせるものがないので句としては失敗である。帯皮の句は器用にまとめられた句で深さを持っていないのが弱点といえはいえぬこともないようである。 みの虫も水取りすめば殻をすて S 熊の皮敷いてあるけどふつり合い S みの虫の句は春になったらこうなるという説明に終始してしまつて余情といふか余韻といふか、そういうものをもつていないといえるのではないかと思う。熊の皮の場合は不つり合いと感じた作者がそのまま句にぶつけてしまったので失敗している、敷いてあるけどふつり合いという説明でなしにそのふつり合いに思ったことを頭において読むものにそれを感じさせる句語を考えるのがよいと思ふ。 脱ぎ捨てて簾にはにかむ竹の肌 和 三郎 竹の皮冬の音して蹴られたり 初 甫 二句共川柳らしからぬ川柳である。それではどが川柳かと言わ

れるであろうが。それは第一句の脱ぎ捨ててという作者の感じであり、また次の句の冬の音を感じた作者の手腕であるといえると思う。感覚の句はともすれば上ツリ、それだけの句になり易いものだが、よく表現されていて課題吟としては佳句といえる。

ふぐ提灯毒気抜かれて灯をともし  
まことに佳句だと思った。皮の題吟にここまで想をひろげられた作者の態度とそれにマッチした表現方法には教えられるものがある。これから人間の皮なのだが、

いれずみもたるんだ皮にいくじなし  
K  
身体髪膚傷けやくぎ墨を刺す  
S  
たるんだ皮にいくじがないというのでは当たりまえの事なのでいくじがないのはどういふことなのか作者だけが判っている共感を得られない。身体髪膚の句は大それな字句を使っているが内容はいれずみをしたという内容を現わしたに過ぎないので表現と内容がちぐはぐなように思った。

腹の皮こんなに厚いか手術室  
S  
腹の皮破れますよと食い盛り  
S  
手術室の句は医者としての句ではなく第三者の目についた句だと思ふのだが、何だか又聞きのことを句にまとめた感じがして頂けないと思ふ。その点食い盛りの句

には真実味があり、ユーモアもあっていいと思ふ。  
皮一重と言えど美貌に目がくらみ  
K  
醜さを慰めてみる皮一重  
S  
皮一重が生生きく感じすぎて、すっきりしない、作意はどちらも面白いのだが、二句共皮一重が邪魔になっている。勿論皮一重にピントを置いては始末に困るのである。

皮膚の下直ぐ骨というスマ  
Iトさ  
S  
骨と皮になっても老婆貯めて居り  
K  
骨と皮になつて財布をまだ握り  
K  
初めの句はスマIトさを皮肉っているのだが失敗している、それは句語があまりにも直接的なために悪い感じを起こさせるからであろう。老婆が貯めているというのはいい所をつかんでいるのだが、次の句の財布をまだ握りという現実的な句にはかなわなかつたといえる。

生きた皮だから百姓の手耐  
えもし  
弘村  
手の平の豆が一家をささえてる  
句楽坊  
どちらも体験の句ではなくて、そうだろうと考へての句ではないかと思ふ。それが決して悪いというのではないが、何かそらそらしさを感じさせるのである。

白黒の皮に悩みの先進国  
T  
古皮に古い酒盛る為政飽き  
滋雀  
社会的な問題に句想を掛けられるのはいい事であるが、黒人問題を詠んだのには皮相的にすぎると思ふ。古い酒盛るといふ句想はいいと思つたが為政飽きという下五文字に少し工夫が足りなかつたのではないかと思つた。

あつは皮むけて都会の夜を  
けす  
S  
しぶ皮がむけて故郷に落ちつけず  
S  
どの句にも言えることは、だれしも考えることはそれだけの句にしかならないということである。皮という題だからしぶ皮がむけるといったのだが、私の句に垢という題で「垢抜けがして腹の子と戻って来」という旧作がある句意はしぶ皮のむけたという句意とかわらないのだが深さが違ふように思ふ。

のに  
杏花  
死して皮残すわたしは何もない  
酔夢  
なんだか道歌めいていて気がすまないのだが、馬でさええの句にはユーモアが感じられるし、わたしは何もないの句には作者の詠歎があるように思つたので採り上げた句である。

頰を染めの句には純情なものを感じさせられるのである。面の皮をむくという言葉があり乍らそうしたものを感ぜさせるのは作者の人柄なのであろうと思ふ。総会屋の句はよく詠んであると思ふ。しっかりしたものをつかんでいるのである。

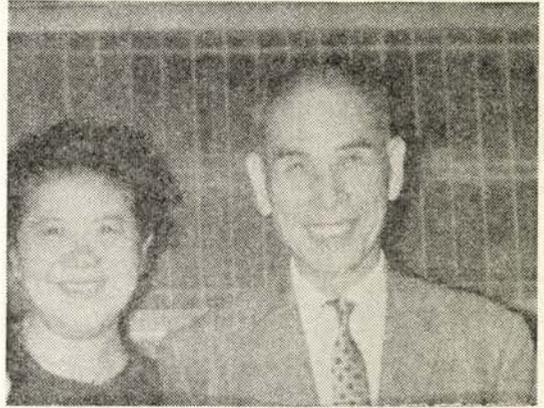
人の皮きた鬼か蛇か子をさらい  
句楽坊  
誘拐事件の犯人に対して思ったことなのだが、これはこれで頂いていい句だと思ふ。いままでにも沢山発表されてはいるがこの作者としての境地に於てである。

皮斬らし骨斬つた将兵がな  
し  
K  
皮きられ相手を倒す必殺剣  
M  
句意としては、兵がなしの句の方に苦心があるのだが、その苦心の割りに共感が持てないのは表現がそこまで到っていないからであらう。必殺剣の句はそうであらうけれども、この句の場合それを説明しているだけで作者の感情がこの句には現われていないのである。

皮算用はすれ晩酌やめにす  
み  
S  
皮算用はすれ晩酌やめにする  
和郎  
何かもうけ口なのであろうと思ふのだが、惜しいかな作者の思っていることが、伝わってこないで、ほんとうに残念である。晩酌の句はハッキリしていいと思ふ。最後に  
帆を上げた伴泣す葱の皮  
T  
というのだが一読して判らなかつた。二度三度読み返して見てそのなにかと思つたのである。それは帆を上げた伴というのは高砂やの帆を上げた新婚早々の若夫婦の伴を言つたのであつて、その伴を泣かすというのは葱の皮をむいて眼にしみるのを言つたのだということが判つたのである。こうした場合はあっさり新婚の伴位かす葱の皮としてもいいのではないかと考へた次第である。この他マンジューの皮やいろいろあつたが紙数がつきたので割愛した。あしからず。

次回研究題  
「素足」 五句以内  
〆切 五月二十日  
発表 七月号の予定  
宛先 大阪府南河内郡美原町  
丹上四〇四 清水白柳

# 展望界柳



若田空勝から飛び発つ 堀地鉄行団に加わり四月廿六日 不朽副会長唐崎専儀氏(左)

## 句会

▼本社五月句会は六日(水)午後六時から、千日前電停前自安寺で開催。風薫る運休明けの宵を句会でくつろぐよう柳友お誘いの上、多数のご出席をお願いする。▼七面短詩クラブ川柳部句会(和歌山市)は四月八日午後六時から奥新和歌の浦、魚又楼で開催された。▼南海電鉄川柳会(大阪市)四月句会は十六日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼大阪通信病院川柳会四月句会は二十五日(土)午後二時から同病院北館五階会議室で開催。▼川維岡山支部三月例会は二十一日岡鉄クラブで開催。▼富柳会(富田林市)四月

吟行句会  
は五日  
(日)観心  
寺松中亭  
で開催。  
▼川維  
鳥取支部  
花見句会  
は四月五  
日(日)久  
松公園二  
の丸で開  
催。▼豊  
中川柳会  
花見の会  
は四月三  
日(日)午後一時から服部緑地公園  
民家東落館で開催。▼四国川柳大  
会は六月七日午前十時から高知市  
の高知県園芸連合会新館で開催。  
兼題、良妻・警察・男同志・ガ  
ス・口下手・敵、各題三句以内、  
席題三題、投句は五十円封入の上  
五月三十一日迄に高知市水国寺町  
一八川雑土佐支部、川竹松風  
宛。▼川維宇部支部五平太川柳会  
創立十周年記念川柳大会は五月十  
七日(日)午前十時から宇部市中  
央停留所前三和銀行宇部支店会議  
室で開催。兼題、嗜着・服地・鏡  
台・背広・特種・売娘・特価・晩  
酌・投資・流行、席題三題当日発  
表、各題三句、投句は五十円封入

の五月十二日までに宇部市東区  
恩田長沢、津秋六花宛。▼第二十  
九回京浜川柳大会は四月二十九日  
(祭)午前十一時から横浜市中区  
寿町神奈川県立勤労会館で開催。  
▼第十回愛媛川柳研究大会は五月  
十七日(日)午前十時から今治市  
常盤町三丁目今治信用金庫三階ホ  
ールで開催。兼題、道づれ・サイ  
ズ・燃える・不都合・ややこし  
い・負け惜み・下積み、各題三  
句、投句は百円封入の上五月十日  
迄に今治市風早町四米子映月宛。  
▼第八回全国鉄川柳人連盟大会は  
七月四日(土)午前八時半から五  
日午後二時まで、片山津温泉湖畔  
荘で開催。▼北海道川柳大会は六  
月十四日(日)正午から札幌市六条  
西二丁目国鉄クラブで開催。▼京  
都柳壇川柳大会は四月二十六日  
(日)午後一時から左京区下鴨宮  
崎町下鴨寮で開催。▼西条川柳大  
会(広島県)は五月十日(日)正  
午から西条町耕道会館で催す。  
▼「北上」誌百号記念第八回岩手  
川柳大会は六月十四日午前十時か  
ら北上市常盤台北上公民館で開  
催。宿題各二句「無限」「流れる」  
「袋」「気紛れ」「失言」「山脈」  
「貝」「耐える」「足音」詳細は  
岩手県北上市本町川柳北上吟社  
へ。

▼尼緑之助氏(出雲市)は四月五  
日川維木次支部十五周年川柳大会  
に出雲支部の柳人十名と出席、遠  
来の正本水客氏と久しぶりに歓談  
された。▼小西無鬼氏(兵庫県)  
は篠山町関係、民生児童委員関係の  
年度末の仕事に追われ、静養出来  
ず  
富柳会観心寺吟行 (四月五日)  
一前列右つて右から菊代・カツエ・すみれ・北  
村・八郎・吉太郎・白柳・一後列、万葉・藤天  
郎・太郎・藤林隆・菊野・林松の諸氏(垂井常享  
社)  
の招きで、「趣味について」と題  
して三十分間に亘り川柳を語られ  
た。▼高鷲亜鈍氏(尾道市)は三  
月二十九日米阪、大万川柳大会に  
出席、路郎主幹と久瀧を叙された  
が、帰宅後、万感胸に迫るものが  
今も尚跡をひいておりますます寄信  
された。▼小西雄々氏(米子市)  
は四月五日木次支部の大会に出  
席、水客、緑之助、独仙、吾柳、  
新雪の諸氏となつかしく交歓さ  
れ、四月二十六日には岡山の久米  
雄氏退職送別句会に出席される予  
定とのこと。▼阿部佐保蘭氏(東京  
都)は人間ドックに入り養生の結果  
果肥ったと言われる程に健康なの  
で、一段落ついたら再び川柳撰訳  
の仕事にとりかかりたいとのこと  
と。北米の村上蘇山氏もあちらの  
英字紙にR・Hブライスの氏の英訳  
川柳を織文せて、川柳を盛んに紹  
介されているそうです。▼小川  
静観堂氏(伊丹市)から、「当地某  
病院出火に当たり早速近火お見舞  
に預り誠にご芳情恭しくお礼申上  
げます。先生も近來兎角ご頑健でな  
いご様子、ご静養お祈り申上げま  
す。先生、まだまだ弱られては皆  
が困ります。▼山内静水氏(竹原  
市)は四月一日姫野温泉で一泊、  
西海橋、九十九島を遊覧、三日早  
朝帰竹された。「渦潮を眼下に望  
む虹の橋」▼野村味平氏(大聖寺



不朽洞の人々



大阪道徳病院勤務の木谷れ莊氏

子供の頃から花柳界で育ったせいか、遊ぶことが好きである。それに家業が料理店であったので、うまいものをたべて歩くのも大好きである。そのうえに旅行好きとききているので全国の名物と川柳行脚を今でも続けている。遊ぶことなら、何んでもござれでいつも貪之だが、豊かな気持ちでノンキな父さんで暮している。

事故なんか気にしませんと旅行好き

(竹 莊)

市)は今回の転居で終戦後から九回を数えることとなるが、落着いた先が、二部制で操業をしている機業地の近くの、早朝の四時半から晩の十時までガチャガチャやられるので、不眠症におかされまし住宅難」の実感を切に味っておられる。▼福田多可志氏(鳥取市)は河村日満氏らと二月から職域の「日の丸句会」を始められた。現在は少人数ながら、ゆくゆくは盛大な句会に育て路郎先生ご夫妻に來て戴けるようにと念願しておられる。▼高橋操子さん(岸和田市)は二月十一日に次女の幸代さんに婿養子を迎えられ、ほっとした気持ちになっておられるが、まだまだ働かねばと店の方は一手に引受けて切り廻しておられ、家内の田満と健康とを感謝しておられる。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は四月五日の朝から六度に亘り咯血された。絶対安静で、キリストの愛に支えられて、闘魂を燃やし耐え抜いておられる。▼後藤梅志氏(大阪市)は三月三十一日大阪府立病院を退院、引続いて南紀白浜に静養の一週間を過ぎた。▼児島与呂志氏(大阪市)は昨年四月以來、労働組合の役員に選任され、川柳精進の暇を見出せなかつたが、諸事にも慣れて来た昨今、多少の余暇を割いて川柳に励みたく思っておられる。▼川崎豊眼子氏(諫早市)は川柳文化会例会を毎月天満町公民館で開催して、指導講座に添作短評を加え、作品の向上に資しておられる。▼塚越速亭氏(東京都)から、路郎主幹の「妻を語るを拝読、四月九日が記念日だったことに六高十菊の嘆を感じましたが目出度く金婚の記念日迎えられた御夫妻を心から祝福申し上げます」との米信があった。▼吉川亜人氏(山口県)から、三月号揮受、相変らぬ編集集のうまさ、それに、「鉄筋の骨組み猫も

吟社の記念大会柳人の句碑等

写真募集

★なるべく詳しく説明を附すること。  
採否は編集局にお任せ願います。  
掲載誌贈呈 川柳雑誌社宛

寒う見る」の先生の句に感嘆しました。▼木山遠二氏(等岡市)から、川雑二月号柳樟室で先生のご不快の趣を知り驚きました。曾てホトギス派の俳人が虚子先生ご健在の間に一句でも多く見て貰い

且入選して置きたいと競うたものですが、これと同じ意味に於ても、われわれ常に先生のご健康を只管お祈り申上げる次第です。▼田垣方大氏(倉敷市)は風邪のため三月二十九日の大万川柳大会に欠席、今年の第一回の上阪のチャンスを失ない残念がっておられる。▼稻本凡子さん(大阪市)は四月十日羽曳野病院を退院、引続き自宅で静養される。▼山内静水氏(竹原市)は九月に開催予定の竹原川柳大会の準備にそろそろと組んでおられる。▼布部幸男氏(京都市)は、目下「先生業」を府からたのまれ、毎日三時間の強行軍。句箋と酒盃の間に原稿紙という生活が理想なのですが、まだまだ使えらと見え忙しい身体になっていきます。▼唐崎専翁氏(若屋市)は、キリスト新聞社主

催聖地旅行団一行に参加し、空路カイロ、エルサレムへ後同地で一週間聖地を遍歴後、ローマ、ジュネーヴ、フラクフルト、ベルリン、并にパリより、ロンドン、コペンハーゲンを廻り五月二十五日帰朝の予定で四月二十六日午後二時二十分羽田を出発された。

慶

▼西いわを氏(大阪府)の令息康雄氏は西川幸太郎ご夫妻の媒介により、大阪交通局勤務梅田正一氏二女純子さんと婚約整い、四月三十日華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げます。

転居

▼傍島静馬氏(高槻市)は高槻市藤の里三四番地へ転居。▼若本多久志氏(西宮市)は豊中市服部から旧居(西宮市津門西口町五〇)の改修が竣工されたので帰居された。▼稻本凡子さん(大阪市)は大阪市南区上本町三丁目一三番地へ転居。

電話番号変更

▼大坂形水氏(大阪市)経営の株式会社オーエスケーの電話番号が左記の通り変更になった。大阪朝局八〇一五番、八〇一六番、八〇一七番、八〇一八番。

正誤

▲前号7ページ下段6行目「肩たたく孫が……」の句作者野迷路とあるは三司の誤りにつき訂正。

☆ ☆

# 大萬川柳大会

三月廿九日  
大萬階上

## 十三周年記念 を迎えて



謝辭を陳べる松江梅里氏

花の春快晴にめぐまれた佳き日、昭和三十九年三月二十九日正午から、阿倍野区松崎町三丁目割烹大萬階上で、昭和三十八年度大萬川柳会の成説を恒例により新番付の方法で発表あり

本年も亦例年により豪華中の豪華司会をされる栞氏から、閉会の辞の小松園氏まで、川柳雜誌社のベテランの総出となり、かてて加えて路郎師の柳話、至上の句会そのものである。

尚遙々尾道から、高鷲亜鍾氏が息念に伴われ参会せられ、久し振りのこととて一入にぎやかになった。

司会は名調子の西尾栞氏、閉会の辞はよくは記憶していないが、二三年前のこと、そのときも閉会の辞の中で「来年からは閉会の辞をもって来られない様にベスト10にはいる」とたしかこんなことを仰言った若本多久志の閉会の辞、挨拶は全身機智みなぎれる川村好郎氏、祝辞は綿密な統計に北川春葉氏、に対し、情熱の権化とも言うべき松江梅里氏が最低の姿勢で謝辞、続いて昭和三十八年度ベストテンの表彰、殊勲賞、敢斗賞、技能賞それぞれ賞状並に賞品を麻生路郎先生の手から授与された。

二位の橋高薫風子氏、四位の本田恵二

兼題「花だより」 正本 水客 選

人

雪解けがすめば故郷の花だより 弥生

地

花だより駅のグラフは花を貼り 凡茶

天

続々とガンセンターへも花だより 八郎

軸

伴せな人だとおもう花だより

兼題「値上り」 清水 白柳 選

人

値上りを軽く聞きつつ爪をそめ 凡子

地

値上りへ旅の予定を繰り上げる 鉄児

天

値上りに子は叱られる日の多し 文蝶

軸

つり銭をもらい値上り知る留守居

兼題「別居」 若本 多久志 選

人

別居して風呂場のしずく冷たい日 水客

地

別居する男におくるちゃんちゃんこ 翠泉

天

別居して養老院の日は長し 双葉

軸

別居したわけ神様だけが知り

兼題「ヒット曲」 土井 文蝶 選

人

コーヒーが冷めてしまったヒット曲 柳志

密談のつもりが酒になる政治 白柳

地

密談へ経理部長がまた呼ばれば 好郎

天

密談の揉めてるらしい高い声 小松園

軸

密談に行くゴルフとは気がつかず

兼題「デート」 西川 晃 選

人

妹のへそくりデート用に借り あいき

地

デートの朝の自分が憎い 水客

天

デートする相手の齢は知らぬまま 洋敏

軸

散る花の哀れも知らずデートする

兼題「女客」 山川 阿茶 選

人

齢五十女客にはかわりなく あいき

地

先客は女とわかる窓をあけ 水客

天

年よりの孤独を救う女客 弥生

軸

女客もやしの尻尾もとってくれ

兼題「手料理」 川村 好郎 選

人

手料理はうちだけらしい花見の座 静波

地

手料理と言う料理屋の箸袋 鉄児

手料理でよしませうころで迎えられ 進之助

天

手料理の味も姑にみてもらい

軸

殊勲賞 高木 桃里 笠岡

敢闘賞 福井 野迷路 大阪

技能賞 出原 真奇 笠岡

禁煙の目に裁かれているタバコ 柳志

天

訓示聞く両手の位置も平社員 市郎

地

反論も用意しているエチケツト 水客

兼題「エチケツト」 菊沢 小松園 選

人

こちこちの理性誘惑函がたたず

軸

招膳にこうもオトコの血がたぎり 素郎

天

誘惑に勝つ口惜しい足袋はだし 嘉代子

地

下手くそな誘いに女のつてみる 水客

兼題「誘惑」 松江 梅里 選

人

移った。

萬歳を三唱して、ベスト10招待懇親宴に

西尾栞氏より祝電の披露ありて、柳話

は短詩文学の大御所、麻生路郎先生。

席、兼題の披露終わりに最後に特別兼

題「きもの」路郎先生選による発表あり

て終って司会者栞氏の発声で大萬川柳会

大萬川柳

兼題「平和」

入選発表

選者 麻生路郎先生  
投句総数 六百十四句  
入選 四十八句

岡山 七面山

花に寝て白帆眺めている平和

富田林 美房

平和さえ西と東で違いすぎ

大阪 茂男

平和な村に突如自衛隊機墮つ

笠岡 二路

保健料払うばかりで一家無事

鳥取 法泉子

平和また積木の如く崩される

大阪 進之助

地図の色変えたい国の平和論

大阪 弘村

釣り堀に駐在さんの顔も見え

大阪 文秋

家計簿の赤字平和にひびを入れ

岡山 十九平

父ちゃんがそうかそうか家で家平和

大阪 保夫

平和論あたまを冷せともいわれ

加賀 光郎

世話やける主人ですのと平和そう

仙台 光道

もみがらがひねもす燃えて村平和

神戸 どんたく

一線を越える度胸のない平和

石川 宗太郎

金で米買える平和よいつまでも

大阪 あいさ

よそ目には平和に見えて倦怠期

大阪 小松園

諦めて暮らしていますのが平和

大阪 春菜

賽銭箱に錠をおろしておく平和

堺 圭井堂

愛人と別れこのかた平和なる

岸和田 きさ子

国華もう酒のむだけの花となり

大阪 阿茶

尻押してよその平和をかき乱し

見島 恵二朗

骨抜きのような平和がもの足らず

山口 弘道

姑が折れてわが家にある平和

地方紙の記者がアブれている平和

倉敷 素身郎

村平和駐在さんは朝寝坊

平和をささえる力が軍備とばおかし

大阪 十六里

無条件降伏のあとにきた平和

高槻 静馬

口下手が言い負かされた平和主義

高槻 静馬

とぼしさに堪える平和にあきたらず

高槻 静馬

一触即発アトムに平和支えられ

泉北 好郎

かくしごと何一つない妻の酌

徳モストデモこれで平和が来るつもり

大阪 柳志

ヒマの種無駄にはじけている平和

豊中 夢虹

ご本家にはあちやんがいてまるゆき

豊中 夢虹

バラの垣二人の平和守る城

国敗れて平和あり女母となる

海越えた恋も平和を祈ってる

大阪 梅里

敷かれてちやんちゃらおかし平和主義

敷かれてちやんちゃらおかし平和主義

神風も吹かずしまいに来た平和

腕力に自信がなくて平和主義

五客

和歌山 木魚

欲しいものだらけでわが家平和なり

大阪 春菜

消費者は王様などと世は平和

岸和田 きさ子

ボロ儲けよりも平和がほしい妻

笠岡 桃里

汗くさい夫を頼っている平和

大阪 柳志

汚職記事鼻で笑っておく平和

石川 宗太郎

ダムになる噂さが消えて表を踏む

石川 宗太郎

(地)

倉敷 方大

平和的解決パバがあやまった

笠岡 桃里

(天)

ボタ山が月にさびれている平和

大萬川柳ベストテン(四月迄)

一 きさ子 七、〇 岸和田

二 夢虹 六、〇 豊中

三 桃里 五、五 笠岡

四 梅里 五、〇 大阪

五 柳志 四、五 大阪

六 方大 四、〇 倉敷

七 静馬 四、〇 高槻

八 弘朗 四、〇 倉吉

九 春菜 三、五 大阪

一〇 野迷路 三、〇 大阪

一一 宗太郎 三、〇 石川

一二 光道 三、〇 仙台

一三 文秋 三、〇 大阪

一四 千翁 三、〇 玉島

一五 美房 三、〇 富田林

- 一六 木魚 二、五 和歌山
- 一七 慶之助 二、五 堺
- 一八 静波 二、〇 羽曳野
- 一九 藤波 二、〇 岡山
- 二〇 一米 二、〇 大阪

以下略

次ぎの兼題 「静養」五句以内

〆切 五月十日

発表 五月二十日

六月の予告 「動章」

〆切 六月十日

発表 六月二十日

投句先

大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

大萬川柳会



いのちある句を創れ



投稿規定  
▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼締切毎月十五日▼投稿先  
本社宛

本社 四月 句会 (大阪市)

4月7日 午後6時  
会場—— 千日前 自安寺

花の四月、行楽日和の暖い日もあ  
かと思うと、うすら寒い雨の日も、ま  
る日もあって、今夕は、雨模様の加減か  
出足は少し遅いようであったが、開会前  
には、いっばいに、会場を埋める有様で  
ある。本日の路郎師の柳話は、主として  
新人の人々に対する、作句上の有益なる  
お話で、懇切なる一指導振りに、いつも  
よりか、長時間に渡る柳話であった。続  
いて席、兼題の披露に入り、天の天は路  
郎師の選で本多清人氏の句に輝き、拍手  
裡に同氏が不朽洞カップを獲得された。  
時に午後九時半。

(座)

出席者——路郎、摩天郎、圭井堂、文  
秋、静馬、八郎、千代、喜雄、滋雀、白  
柳、金三、進之助、舟遊、花梢、すみ  
れ、薫風子、多久子、句楽坊、女、白  
溪子、たつみ、判志、句会坊、いさむ、  
庸佑、瓢太、泉陸、一舟、四郎、専翁、  
天樹、阿茶、恒明、美房、トメ子、文  
夫、すすむ、栞、清人、六童子、有子、

みさ子、季養、渡乃、宏子、

兼題「度胸」 西尾 栞 選

度胸さえあればと投手惜しまれる 阿茶  
酒の気が抜けて度胸も消えていた 文秋  
度胸見せられマダムほれなおし みさ子  
安月給背広買うにも度胸入り 喜雄  
その度胸ボスの養子に見込まれる 静馬  
貫録が違い度胸を寄せつけず 白溪子  
度胸にはあらず仕方がないからさ 白柳  
彼も人われも人なり度胸出せ 瓢太  
半分と見ても度胸のある話 一舟  
くそ度胸もともと裸やないかいな 恒明  
一線を越えた女にある度胸 いさむ  
災も笑ってすまます度胸もち 句楽坊  
口先の度胸肚まで見透かされ たつみ  
どたん場の度胸へようやく運が向き 白溪子  
はったりをきかず度胸をうらやまれ 阿茶  
ここまでは度胸一つで来た出世 すむ  
一本でゆくと入試のくそ度胸 圭井堂  
手術せな助からん度胸すえなはれ 文秋  
年のこう舞台裏をのぞかせず 判志  
度胸ある上にお顔が物をいい 摩天郎  
刺すだけの度胸あるに逃げ回り 千代  
仲裁に這入った度胸見込まれて 多久子  
香車のよな度胸に惚れて苦勞する 美房  
親に似て舞台度胸のある子供 白柳  
横着を度胸にしている愚連隊 喜雄  
かけおちの女の度胸手に余り 白柳  
度胸すえとこいと言われてしりこり 句楽坊  
度胸一つで社運持ちなおし みさ子  
混合へはいる度胸を持ち合せ 進之助  
船長の度胸へ波も撫いで来る 清人  
やけくそと知らず度胸をほらめり 宗義

舞台度胸つけるお酒を飲みますし 阿茶  
いい度胸だと貰ってお金は貸さぬなり 聖天郎  
インラビエリ 先つ度胸の程をほめられて 栞

兼題「人柄」 若本多久志選

初対面その人柄が気にいられ 句楽坊  
何も彼も知って人柄無口なり たつみ  
腹で泣く術心得て五十路過ぎ 天樹  
お人柄宣伝部にはむいていず 阿茶  
聞き合せ親の人柄からたずね 文秋  
辛抱強いのを人柄と見られたり 栞  
人柄にふれず肩書のみに惚れ いさむ  
人柄の丸さ近所のまとめ役 たつみ  
人柄に惚れる世間のたしかな眼 天樹  
お人柄に目頭あつうなる思ひ 摩天郎  
床柱背ににこやかなお人柄 すむ  
信仰が滲み出ているお人柄 圭井堂  
口ひげに品も出ているお人柄 金三  
人柄にふれず家柄はめておき たつみ  
人柄を買われて今日の回り椅子 六童子  
いらぬこと喋り人柄見抜かれる 瓢太  
貧乏がこんな人柄かえていき 句楽坊  
ロマンスグレー円熟というお人柄 進之助  
酒一本出せば人柄変って来 一舟  
お人柄だまっけていても座を押え すむ  
人柄をしのばすよ趣味をみせ 句楽坊  
お人柄また仲人を頼まれる 舟遊  
去り気ない言葉ににおうお人柄 女  
よそ目にはは幸わせそうな腐れ縁 八九寸  
よそ目にはえびす顔だが火の車 野迷路  
おしどり夫婦とよそ目は信じ切り 宗義  
ジャンパーになつても人柄争はず 花梢  
人柄が昔を語る紙屑屋 阿茶  
人柄へだます気てくる客ばかり 摩天郎

お手本にされて人柄肩がこり 恒明  
人柄へ先ず母が惚れ父が折れ 六童子  
人柄を慕われスラム街に老い 白溪子  
上品な人柄水鼻すすり上り 半月  
人柄を信じて貸して疑わず 静馬  
人柄は惜しまれ停年は容赦なく 泉陸  
人柄がこころでは酔えぬ酒と知り 清人  
お人柄ただそれだけの取柄なり 多久志

兼題「よそ目」 吉田圭井堂選

よそ目には隠居パンコプロの腕 生薑  
よそ目はど楽しやないのととて借り 美房  
よそ目はど楽しやないのととて借り 美房  
妻の愚痴よそ目の派手を言い並べ いさむ  
よそ目には自転車繰業とは見えず 静馬  
よそ目には言うことのない家に見え 庸佑  
共稼ぎよそ目程には貯めとらず 清人  
よそ目には紳士二重人格とは知らず 多久志  
よそ目はど気楽に見え秘書でなし たつみ  
よそ目にも婦唱夫隨を見抜かれて 滋雀  
よそ目して暗記で読んでる一年生 喜雄  
気苦勞はよそ目へ洩れぬ門構 白溪子  
他人の目夫婦別れを不審がり 文秋  
よそ目にはこんな会社がよく見えて 庸佑  
はたの目がどうあろうとも 主義に生き 美房  
よそ目には派手な商社の台所 すむ  
よそ目にはどどうつうろつと満足し みさ子  
よそ目には義理とは見えず娘は育ち 花梢  
よそ目には瓦たてやうき貰けていき 静馬  
金がないなんてと笑いとばされる 文秋  
よそ目には日好日の楽隠居 静馬  
才色兼備の奥様がいてなぜ二号 進之助  
売れぬから改装すると見してくれ 文秋  
よそ目には儲け頭でたかられる 圭井堂

兼題「仮縫い」 橋高薫風子選

仮縫いを叱り飛ばした大猫背 野迷路  
 仮縫いの予定日早く破 起き 千夏  
 レディモト 仮縫いよりもピタリ合い 半月  
 仮縫いへ止まぬ御世辞を余し 宗義  
 仮縫いにはきあい首吊り買うて来る 泉陸  
 仮縫いのもう一度柄をほめておき 栞  
 仮縫いに来てポーナスの口を聞かれ 摩天郎  
 仮縫いがすんででてる膝小僧 阿茶  
 姉女房らしく仮縫いについてくる 一舟  
 スラックス 仮縫いこそばいとふれ 八郎  
 栄転の日を仮縫い 念押され 六竜子  
 仮縫いに秘書の意見も聞く社長 圭井堂  
 仮縫いへ女社長の午後は留守 舟遊  
 スタイルの自信 仮縫いひまがり かつみ  
 指先がどこにふれようと仮縫いの 八郎  
 仮縫いへ腹巻きをとる程 親し 白柳  
 仮縫いに注文つけて月賦にし 判志  
 夫には内緒 仮縫い済ませて来 いさむ  
 きみじかも仮縫いだけはのんびりし 句楽坊  
 集団就職もう仮縫いの出来る腕 清人  
 仮縫いになっても女まだ 迷い 花梢  
 仮縫いに来たのが逢うた最後です 天樹  
 仮縫いのまま人形にさせてあり 舟遊  
 はじめからやる程 仮縫いなおされる 庸佑  
 仮縫いの鏡に税吏来たを 知り 滋雀  
 仮縫いのお世辞前から後から 栞  
 仮縫いはジョースに口をくげず去に 薫風子  
 席題「坂道」 清水白柳選

ハイヒール坂道へ来て腕を組み 進之助  
 坂道で心ときめく手をとられ 花梢  
 坂道になって初めて手をつなぎ 喜雄  
 坂道へかかっアベック黙り込み 多久志  
 坂道になり駅伝の勝負どこ 清人  
 坂道でマイカト止める石がいり 句楽坊  
 坂道で立話にも上と下 失名  
 坂道でやせた人にはかなわない 金三  
 売れるのか坂の途中へ店を出し 庸佑  
 坂道の中途事故の碑が一とつ いさむ  
 坂の道淋しがり屋の好きな道 薫風子  
 坂道のしたまでパパを送って来 庸佑  
 坂道で飛ばした帽子に追いつけり 千代  
 坂道にお郎つぶく暗い街 静馬  
 医者通い下り坂でも持て余し 滋雀  
 坂道を一息に登るうれしい日 たつみ  
 坂道の上の家なり 推理され 栞  
 坂道でやっつ別れる気がきまり すむ  
 坂道をはりつめればトラビスト 薫風子  
 坂道の上へ集金ブツクサと 多久志  
 目を離せば又坂道へ三輪車 圭井堂  
 坂道で母のあゆみに歩をあわし 美房  
 坂道になっても続く愚痴話 圭井堂  
 坂道から社長旅館へ引き返し 静馬  
 借りに行く時は坂道苦にならず 一舟  
 花どこでない坂道を見に寝られ 圭井堂  
 坂道へ来て金魚売り肩をかえ 四郎  
 席題「円満」 金井文秋選

コップ一つハストコロ二本立てのみ 進之助  
 よんどころなく円満の五十坂 喜雄  
 円満さ金魚の目にもうつるなり 白柳  
 円満が人気テレビの幸子さん 金三  
 満ち足りた生活と見える犬のつや 六竜子  
 円満に妻の醜態の後を追いつ 失名  
 血圧あがり人生に円みもち 判志  
 円満にしてたら金もたまつて来 一舟  
 茶羽織が似合うお人で角がとれ 進之助  
 水差せば妬げてますとあしらわれ 一舟  
 円満さ数かれることを苦にもせず 文秋  
 席題「交差点」 菊田いさむ選

交差点ボリスの声がかれている 恒明  
 交差点五田落としたまま走る 文夫  
 交差点ここからネオンの街となり たつみ  
 保婦さんの手しかりと交差点 六竜子  
 交差点お召車ゆっくり渡つてき 白溪子  
 叱る身に一度なりたい交差点 圭井堂  
 交差点サツソーと行くハイヒール 多久志  
 交差点人も車も目がすわり 文秋  
 交差点右と左にデモの列 舟遊  
 交差点電車に連れて横断し 専翁  
 サイレンが四方を止めた交差点 圭井堂  
 とび出した犬には勝てぬ交差点 圭井堂  
 交差点三十秒を長く待ち 進之助  
 交通地獄二軒つづいた交差点 進之助  
 落ち付きのない人ばかり見る交差点 文秋  
 子供の手握り直した交差点 恒明  
 交差点小犬も背で渡つて来 多久志  
 迷い犬よちよちと交差点 いさむ

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

食品と原資材機械包装の総合誌

# 食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区藻辺町5 (361) 9373代  
 支局 東京都千代田区神田船場町2 (291) 9629代  
 名古屋市昭和区村田町2 (88) 9069

あんまり大金で屈ける気になつた 梅里  
 三面をむきよ読んでほいと捨て 清子  
 兄弟子に三役薩でよく仕え 阿茶  
 千鳥足落ちた財布へよつて行き 柳志  
 三面鏡女飽かずに首をまげ 柳宏子  
 三面鏡孤独の鷺牙えてみせ 滋雀  
 拾い物届け足音高う去に 珠笑  
 始一つなめて幕間すわつてる 生薑  
 三面の明るいニュース読み直し 一舟  
 打ち明けるつもり終点近くなり 小松園  
 入社して三月要領だけ覚え 文秋  
 カラ振日も三回目には度胸が出 瓢太  
 雛祭り孫正客に座らされ 野菜  
 春の背また終点で起こされる 専翁  
 追われる身先ず三面に眼を通す 圭井堂  
 三面六びただ金を借りるだけ 東天紅  
 終点を知らぬスポーツ終ちろげ 洋敏  
 三月してヒモの存在やつと知り 紫水  
 おちくられそうでもないがと三面鏡 八郎  
 終点に来てたじろがぬ処世術 有子  
 三夜を負かした夢でとんで起き 嘉代子

よく振れていた三振賞められる 静馬  
三面鏡角度を替えた美しき 玲人  
役得が過ぎて終点高いびき 双葉  
里の親離人形に気をつかい 一栄  
三月の話題は試験に明けくれる 宗義

川雑 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

貧乏も子等の笑顔にすがられて あいき  
証人もとらず利息もきめず貸し 野菜  
ふところを互にあってに飲み仲間 城東  
女の味知つてると言うのが気に入った 八郎  
歎医者と言ふ易う言うて診て貰い 柳宏子  
まかされて買いかぶられた感じなり 文秋  
簡易宿過去を忘れる 耐句う 六童子  
墓に付ちマツチのゆる音を聞く 白柳  
音もなく影絵のように尼僧行く 清子  
かけ湯する音もはばかる貰い風呂 珠笑  
嫁入りのための卒業証書受け 半月  
卒業だ背広だ恋だ就職だ 柳志  
卒業へ写真の父も笑うごと 一舟  
母校となる庭へ名残りのつきぬまま 一栄  
養老院日当る窓を恋しがり 三時  
後暗いことない身ボカボカ陽あたり 天真  
日当りへ移せば小鳥啼き初め 生薑  
世話甲斐も日当りも上茄子の色 井平  
予約席誰の席かと気にもなり 正彦  
予約席気ずい人と並ぶ羽目 静馬

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

未亡人一心不乱に子を育て 泉水  
お惚気へはつと亡夫の眼が光り 曉舟  
パッテンがまた抜け切らぬ三代目 紅葉

善意とは思えどひがむ未亡人 内海  
四度目という未亡人金があり 快夢起  
功成りてまだ捨て切れぬ国訛 麗花麗  
黒を着て色気を見せる未亡人 浅太  
同郷のつどい訛で親しまれ あき坊  
ローカル線業しいものに 国訛 峯円  
聞く度びに父母恋し 国訛 静杉  
赤毛布同じ 訛の気の強さ 沈丁花  
船郷して母の訛にいたわられ 斧平  
奥さんのお国訛で親しまれ 拜山  
訛つてのお国訛へ猪口を差し 万里歩  
思案する 姿冷い未亡人 雪女  
未亡人語索好きな眼で見られ 柳葉  
未亡人若く気をもむ会葬者 紅溪  
未亡人紅の濃さにも気をつかい カロ女  
亡き夫の面影胸に強く生き エス子  
気の弱い息子を嘆く未亡人 平八郎  
未亡人濃い口紅で三回忌 蒼蛇楼  
現実を殺して生きる未亡人 三石

川雑 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

かく苦きもの知りそめし眉すみや 極堂  
苦き舌うち下駄は重き音をもつ 尚平  
海空が若く黄跡葛にまかせ 枯粒  
ことりともせぬ隣室に居る女 和三郎  
運河あり百万円は小さき金 幸男  
闇におももの黒髪むせびなき 紫蘭  
千潮へ下剤がきいてきた運河 ゆきら  
むせび泣く人焼く扉締る音 烏雀  
むせびなき電話短く切つてより 司郎

川雑 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄遊

文化的な生活パン食だけ合わず 照路  
しきたりを文化のせいにして破り 宗義  
日本の文化を重窓から眺め 哲郎  
文化都市裏のドブから蚊が生まれ 佐加恵  
文化祭野ばんな踊ゆきかし 柳五郎  
落書きで汚されている文化財 胡食  
文化章明治の型で椅子にかけ 鉛ん坊  
アパートへ月賦の文化かき集め 宗義  
老母も手が出ぬ文化台所 三平  
文化の日明治生れに別な意味 鉛ん坊  
文化住宅昔は芋づる差したとこ 秋月  
明日知れぬ姿で無形文化財 鯨虎狼  
この辺に河が流れていた文化 幽谷  
けつまくを文化に遠いとこで生み 東岸  
隣りまで来てる文化が寄りつかず 鼓山  
にむらりに生ませ文化の日を過こし 久米雄

川雑 備前支部句会 (岡山市)

横山一声報

親類が皆な帰った座の広さ 真奇  
新築へ古さを誇る軸を掛け 秋月  
女房のサラリ子に着せ顔へ塗り 輝生  
花だより清潔法もやって来る 鼓山  
長となるその日親しい友を捨て 良江  
女房へここを讀みなと週刊誌 芝月  
たくらみでなく老妻の敬語ぐせ 三六  
なめくじの如く闘病日向ほこ 耕水  
ご勇退など頭を下げてくれ 久米雄  
奥さんが羨ましいとはぐちだった 東岸  
田を売ってデモの先頭出来上り 千秋  
談判に行く先頭をゆずり合ひ 胡風  
先頭になつて歩いたはしご酒 照路  
先頭になつて歩いたはしご酒 照路

川雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

先頭ははや頂上で呼んで居りのぶ子  
迷い道したか先頭引き返し 伊久野  
先頭とビリと並んで仲が良い 汀子  
先頭で指揮してたのがに首され 水仙  
先頭の小さいやつが俺の子さ 美枝子  
先頭を走る先生あごを出し 草郎  
娘の入試夫婦で受験する如く 計  
夫婦仲いいのも見せる里帰り 浄美  
夫婦ともけちで立派な家を建て 幸仙  
よろよろとする夫婦に孫が出来 遠二  
後家となり始めて夫婦の味を知り 白晝

川雑 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

ゆつくりと寝たい日曜子が起し 勝喜

日曜日桜見頃という便り 呑  
 日曜の朝は起きない共稼ぎ 勝子  
 約束は結局次ぎの日曜日 斐山  
 日曜も弁当のいる職に生き 松風  
 日曜の予定が狂う不意の客 嘉子  
 小春日の親子ねそべる日 窓花  
 ウナ電を打つ日曜の局 夢生  
 借りてゐる方が炬燵で飲んでいる 美和  
 トランプへ占う炬燵一人更け 伸  
 雪の夜の炬燵で読むは敗戦記 紅雨  
 貧乏はしても性格曲げられず 蛇  
 禁煙へ未練が残るガスライター 未遂  
 右打てば左のははも無抵抗 大破  
 出張へ朝着く予定の乗車券 古城  
 出る小言ぐつとこらえて送る朝 千代  
 居候朝から飯の出来をほめ 波浪  
 日曜のプラン親子で喰い 柏子

大阪逓信病院川柳会 (大阪市)

森下愛論報

色男一寸身体が少さすぎ 竹青  
 往年の色男会長席で羨び切り 春雄  
 色男一歩おくれドアーをおし 敏行  
 名案は明石の海に橋をかけ 夏生  
 つもり貯金名案ねと妻得意 ハナ子  
 名案もなくケセラセラと寝てしま かをり  
 急用にそうかくと盤にらみ 愛論  
 買物に行く妻の肩はゆれ 幸男  
 何買いまんのやと行列の尻えつき 風仙洞  
 お買徳品を手と手が混ぜかえし 没食子  
 嫁してゆく娘の買物へ母淋し 宏子  
 五千円も買った景品ガム一つ 竹莊

丸紅川柳会 (大阪市)

村田瓢太報

嵐山進学バスした顔ばかり 好郎  
 まだ遠い夢かげろうの分譲地 立見  
 橋の名も入れて記念の写真撮り 瓢太  
 嵐映のボートで人目はばからず 泉陸  
 行先は幹事任せただついて行く 裕児  
 赤ちやうちん茶店の賑う嵐山 斗星  
 陽炎の立つ田値上り待っている 陸子  
 告白され先約るとは言いそびれ 美幸

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

何事も信じる癖がまたいふれ 専翁  
 陽当りがよくて課長宅と知れ 和郎  
 ほほえみは社宅に残る葉書き画 句念坊  
 上役の近い社宅は愚痴を言い 摩太郎  
 三十年社宅すまいも今日限り 八郎  
 お隣りの声に社宅の弱かりき 圭水  
 社宅の子万年平を知らずして 貴山

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

身持まで遺伝するかと嫁姑 美房  
 堅パンのパバを子供はけがたがり 清子  
 お互にたたけばはこり妥協する 青米  
 ポケットの切符二枚にある弱み 花梢  
 定年後まだ一かせぎするつもり 林松  
 酒の味にがし定年意識する きはち  
 定年は白髪をそめて虚勢はり 菊代  
 ついで定年どうやら平でおわりそう 美代  
 定年の金は二号にしてやられ 半月  
 定年を潮に二号と縁を切り 静林庵  
 ボーナスの事も昔の夢となり すみれ  
 定年をねぎらう妻のいてくれる 一栄  
 定年の父が見ている漫画本 摩天郎  
 広告をせんのにスード大はやり 紅月

ターミナル春商船のビラが派手 六童子  
 女房連れにもアルサロのビラをくれ 柳太  
 広告の魔術に踊った事を悔い 太路  
 ちっけな親切大きく帰って来 米更米  
 ほんとうの親切して来た日の執務 東雲楼  
 親切な方しか彼女思っつてず 好郎

諫早川柳会 (諫早市)

川崎靈眼子報

すべりたバナナの皮を足を足でける 薰風  
 バナナ園明るい棚に立ちそびれ 昇竜  
 好物のバナナで母をよろこばせ やすよ  
 家に待つ孫に土産のバナナ買う 随心  
 おちよほ口バナナの時は太くあけ 嘉象  
 色気づく頃バナナにも値が附され 重信  
 店先のバナナ陽気にぶら下り 叫峰  
 危険物バナナの皮の捨てどころ 歌人  
 戦友に詫げる気持で食うバナナ 正義  
 はるばると裸になり来るバナナ 靈眼子  
 弓なりに曲るバナナの生れつき 重幸  
 指一本もぎ取るように剥ぐバナナ 靈眼子

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

お転婆の方がお先きにゴールイン キヨ  
 花よりもダンゴと春を飲み歩き 一枝  
 信号はきちんと守る酔っぱらい 慶之助  
 春の海抱かれてみたいうねりよう 惠美子  
 組合の役にお転婆三選し 弓彦  
 稲光りリングむく手をよと止め 醉泉  
 入試パス春を全身で感じとり 幸児  
 デートの日妹がついてきたらみ 尤三  
 丹念に求人欄を読むベンチ 禰郎  
 三度目のデートくるべきものが来た ゆきを  
 冬眠をいや応なしに掘り出され 素郎  
 合格のよるこびと来る花だより 梅里

多宝塔川柳会 (下松市)

徳光秋人報

行過ぎが課長の席を遠くさせ 功  
 行過ぎの婦人会長落選し 夢八  
 行過ぎてバックしてまで乗せてやり 忠路  
 出戻りの姉が家計を切り廻し 涙草  
 行過ぎを叱って知恵を貸しやり 狂衣  
 孫の手も寝たまま位置に置き 多津朗  
 孫の手を土産と決めて喜こばれ 功  
 抱き上げた孫の手眼鏡がとも好き 多恵子  
 孫に手を引かれ靖国の砂利の音 義照  
 孫の手で除幕をされる立志伝 拾石  
 お彼岸を単車でお経もスビッド化 秋人  
 竜の春国土うるおい初みくじ 千代子  
 初詣宮司総出でみくじ売るとし 子  
 願いなき子等が鈴振る初詣 夢八  
 拍手も希望も高く初詣 秋人  
 初詣神に囁く願い事 涙草  
 標本のがい骨歩きそうな夜 多津朗  
 酋長の子が遊ぶされこうべ 忠路  
 がい骨が出たとも知らず困地住み 同  
 骸骨のプローチきりつとしたマダム 夢八  
 がい骨も情死と聞けばなまめかし 夢八

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

# 大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇  
 TEL(三三)三九三五番

鮎の店 アベノ橋近映地下食通街  
 TEL(三三)〇一四七番

串の店 南区豊屋町三ツ寺センター  
 TEL(三三)九一八四番



# 柳樽室

路郎生

★バカに早く夏が来たかと思うと、不意に冷える朝もある。季節の気紛れは健康を害しているものにとっては敵だ。寄稿家や柳友諸氏の健康を思うや切である。ご自愛ありたい。

★「興安嶺の雨」は本誌ならではという毎号筆筆縦横の随筆大家東野大八氏のもの。★「小紫」は古句研究の第一人者、富士野鞍馬氏の興味ある連載もの

★「川柳初篇研究」は古川柳研究家の九十府・岡田甫両氏の輔導の下に、柳風・啞三味

・喜代人・重義・博美  
・和雄の諸氏が真摯な研究の発表である。

★「私の好きな愛欲の一句」は魅力ある好アングレートとして迎えられることと思う。本稿は誌面の都合上(上)を発表し、(下)は次号のお楽しみとした。

★「句評デイスカッション」は中堅作家の清生・兎・夢虹・薫風子の四君をレギュラーとして熱のある句評を展開させるための企画をしたので皆さんのご声援が願いたい。締めくくりは春三君がやって

くれることになったの  
で意を強くしている。  
そのうちに恰好がつい  
たら、ゲストを迎えて  
句評に花を咲かせて貰  
いたいと考えている。

★拙稿「妻を語る」は  
予想外の好評を博し  
た。引き続き書くつも  
りだが、何分多忙中の  
執筆なので、年代順に  
順序を立てて書くこと  
が出来ない。とにかく  
腹乃の性格や生活振り  
や句風などが幾らかで  
も判ってもらえたい  
と思っている。★其の  
外に多くの好読物を満  
載することが出来たこ  
とをよろこんでいる。

ご味読が願いたい。  
★なお愛読者諸君から  
も川柳に関する意見や  
批評などがいただけれ  
ばありがたいと思う。  
本誌はどこまでも皆さ  
んのものであるからこ  
遠慮なく投稿ありたい  
★「社の黒板」にもあ  
る通り、私の喜寿、金

婚の祝賀行事は私のわ  
がままから、とりやめ  
ていただくことにした  
のでご寛恕が願いた  
い。その代りご厚意に  
応えるため他の方法を

だ。今の世の中では、  
そう簡単に移転も出来  
ぬので、せめて階下か  
ら階上に移って気分を  
新たにすることにした  
のである。その点新居

公民館、☆かがみ句会  
・2日(土)夜、題、  
どたん場・入口・余生  
・テロ・片手間、所、  
池田古心居、☆京都旬  
会・16日(土)夕、題

所、未定。☆玉造句会  
・11日(月)六時半、  
題、封筒・売り上げ・  
準備、所、市電玉造南  
百米大阪信用金庫。  
☆阿倍野句会・20日  
(水)六時半、題、粹  
人・半端・油・食わせ  
もの、所、阿倍野区松  
崎町三ノ一〇(柳烹大方

## 社の黒板

★路郎主幹の喜寿・金婚の祝賀行  
事が川柳不朽洞会が主軸になっ  
て、全国や海外にまで呼びかけ、  
大々的に行なう企画が昨年以來、  
たびたび協議があった。しかし、  
路郎主幹は、そうしたご厚意だけ  
でも感謝に堪えないが、何分目下  
考慮したいと思ってい

る。  
★私は近く、編集室を  
二階に移すことにし  
た。そして、ベッドを  
その隣室に移して、雑  
音から少しでも通がれ  
ることにした。第一の  
ネライは気分転換に  
ある。終日執筆してい  
ると、アタマに圧迫の  
感じ方がひどいから

を求めて八十回も引越  
した食満南北の  
時代はよい時代  
だった。  
川柳支部句会  
五月  
☆明和研究句会  
・10日(日)一  
時、題、還る・  
赤・青年、所、  
阪神電車鳴尾駅  
東南二百米鳴尾

の状態で、それにお応えするだ  
けの健康ではないことを自覚さ  
れ、折角張り切って企画されてい  
るのに、言うにしのびないが、そ  
うした祝賀行事は取りやめて欲し  
いと言われている。それに代るも  
のとして、本誌の四百五十号記念  
をやって欲しいとのことで、社と  
しても、その意を諒として不朽洞  
会の世話役にも報告することに  
した。

### おわび

ごしばらく発行日  
がズレていて、鶴首さ  
れているのがヒシヒシ  
と感じられ恐縮の外な  
い。極力取戻しに骨を  
折っているのに、今し  
ばらくご辛抱願う。

(編集局)

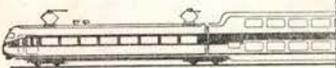
大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ

## 近鉄 2階特急

大阪一名古屋 ノンストップ  
2時間13分

大阪上本町発……毎時0分  
名古屋発……毎時30分

▶伊勢・名古屋ゆき  
大阪上本町発……毎時15分  
▶伊勢・大阪ゆき  
名古屋発……毎時45分



近鉄

特急券のお求めは日本国内各駅  
21日前から各案内所  
本交通公社



昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可  
昭和廿九年五月二日発行 (毎月一回一日発行)

編集 藤田 兼  
発行印刷人

藤生幸二郎 発行所

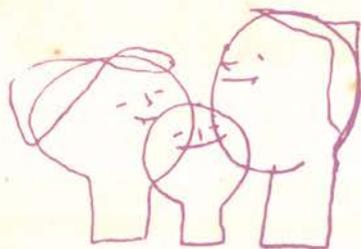
川柳雑誌社

大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地 電話大阪(6)71-6081

新橋口橋大阪七五〇番

正価百二十円 送料六円

一家そろつてホーライ党



廣東料理 豚饅 焼売



大阪なんば・TEL (64) 551-2

「中外製薬」  
技術陣の新開発!

新型 健康増進剤!



エネルギーを産出するTCAサイクル。蛋白の産生を円滑にする尿素サイクル。この二つの作用を試活し、栄養を高める新型健康増進剤です。  
☆栄養がすぐれない☆疲れ易い☆病中・病後で体力が弱っている☆肝臓や、胃腸の働きが不良などの際に用いれば好適です。

(包括・価格) 六〇錠 四〇〇円  
一二〇錠 七〇〇円



みさき大つつじ人形

風雲戦国史 豪華見流し25場面

3月20日~5月31日  
入場料 大人 150円  
小人 80円

第1会場 みさき公園  
第2会場 たんのわ遊園

南海電車



国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る  
国際観光旅館

うおまたろ  
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・0387